

## 第五章 日本庭園における借景庭園の構成

## 1. 本章における研究の背景、目的及び方法

第三章の日本造園における借景という用語及び概念の変遷に関する分析から、日本の庭園の中では、かなり多くの庭園が借景庭園と位置づけられていることがわかった。すなわち、1891年から2004年にわたって、63件の関連文献が得られ、その中で合わせて95もの庭園が借景庭園とされている<sup>1</sup>。その中、特に大徳寺本坊方丈庭園、慈光院庭園、円通寺庭園の三つの庭園が借景庭園として言及されている頻度が最も高い。つまり、これら三つの庭園は公認というに近い借景庭園といえる。さらに、これらの三つの庭園の要素及び空間構成の分析から、「小中見大」の意匠がみられ、大小の比が重点であることがわかった。しかし、これら三つの庭園に関する分析だけでは、ある一つの問題点が残る。その他の借景庭園、あるいは借景庭園の総体概念において、「小中見大」の意匠がどのように現れているのだろうか。

借景の概念あるいは借景庭園の実例に関する日本の文献は非常に多い。しかし、その多くはある長い総論的な文献の中の僅かな部分のみで、十分に言及されていない。借景庭園を単独に研究対象としている文献も若干存在し、その中で上原敬二の1926年の「借景とヴィスタ」、伊藤ていじの1964年の『借景と坪庭』、進士五十八の1988年の「借景に関する研究」、本中真の1994年の『日本古代の庭園と景観』と1997年の『借景』が代表的な五つの文献といえる。これらの重要な既往研究については、本論文の第一章で既に取り上げた。これらの文献は確かに借景についてかなり深く研究されているが、借景に関する研究余地はまだ多く残されている。例えば借景庭園の実例に関して、景観工学の概念及び方法を用い、全体的な系統の把握及びその分析についての研究はまだなされていない<sup>2</sup>。本章ではこの点を研究課題として扱う。

もう一つ研究方法に関する問題がある。借景庭園の研究のみならず、日本の庭園研究においては、庭園を建築及びその周辺の環境から切り離して、単独の研究対象とする傾向が強かった。重森三玲の『日本庭園史図鑑』と『日本庭園史大系』の中に収録されている実測図などには、このことが顕著に現れ、建築及びその周辺環境の部分は

1 95か所には歴史上非常に著名であるが現存しない庭園も含まれている。例えば、石田別業、伏見山荘、浴恩園、古稀庵、戸山荘等。

2 伊藤の研究においては借景庭園における要素の構成に対して重点的に分析を行い、六つの主な種類に分類した。しかし彼の分析は定性的なものである。ほかに、進士は研究において景観工学の概念と方法、例えば借景の視距離、仰角等を取り入れたが、彼の分析した庭園数は少なく、これらの概念を用いた量的な分析から得られた結論も限られたものしかない。

殆ど省略されている。これはこれまでの借景庭園の研究における不十分な点である。庭園自体に対して建築、庭園そして眺望環境の三者の関係こそが借景庭園の重点であると考えられる。

これらの背景に踏まえて、本章では、なるべく全面的に借景庭園の実例を収集した上で、景観工学の概念及び方法を導入し、建築、庭園そして眺望環境の三者の関係に着目し、定量的に借景庭園のそれぞれの特徴及び構成関係を把握し、さらに借景という現象における本質的な理念を明らかにすることを目的とする。

研究方法としては日本に現存する庭園の実例を対象として、景観工学の手法及び借景庭園自体の構成特徴を踏まえて、独自の分析指標を設定し、以下の分析を行った。すなわち「借景庭園に関する分析」、「山に背向する庭園に関する分析」、「京都における臨済庭園に関する分析」の三点である（図-1）。分析指標に関しては、景観工学で用いられる視点場、視距離、仰角などの概念を導入した上、同時に庭園自体の種類、立地、境界、奥行き、方向性などのそれぞれの概念についても整理を行い、これらに基づいて「大小性指数」、「距奥比」の二つの指標を設定した。具体的には、先ず「借景庭園に関する分析」では、上述した 63 件の文献における 95 庭園に基づき、更に重森三玲の『日本庭園史大系』を参考とし、関連する研究文献に指摘された借景庭園の実例を収集した。これら中から、指摘される頻度の高い 31 か所を分析対象と

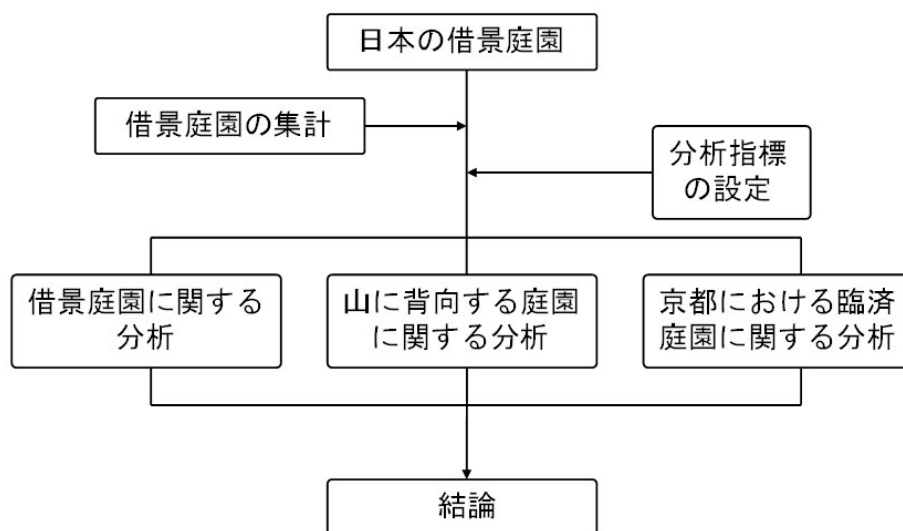


図-1 本章における研究の流れ

して<sup>3</sup>、上記の指標に基づいた分析を行い、重点的に「小中見大」の意匠及びその意匠の関連要素について検討を加えた。次に、31か所の借景庭園の中で、10庭園は立地上においてそれらすべてが山麓あるいは山腹に位置するが、どれも隣接する山に面しているのではなく背を向けているという共通性をもつ点に注目し分析を行った。この立地の特徴に関して、全面的に重森三玲の『日本庭園史大系』の中に記載されている各庭園を検索した結果、12庭園がこの特徴を有していることが得られた。それらを分類し、それぞれの庭園の眺望対象及びそこに反映されている眺望意識に注目して分析を行った。さらに、本研究の第三章では大徳寺本坊方丈庭園などの3つの典型事例を分析した結果、これら3つが全て臨済宗の書院枯山水平庭<sup>4</sup>であることが判明したことを踏まえ、ここに注目して分析を行った。同様に重森三玲の『日本庭園史大系』の中に記載されている各庭園を全面検索し、京都地域に置ける主要な臨済宗寺院の庭園32個を統計整理した。そして中世及び近世の京都の都市配置を合わせて考慮に入れ、各庭園の所在地から周辺の主要山脈への眺望について、地形の角度から分析を行った。また、各庭園が当時の歴史条件下における借景の可能性について研究し、当時の立地環境の特徴と借景の成立条件の關係に重点を置いて分析を行った。

## 2. 「小中見大」という意匠

### 2-1. 分析指標の設定

前述の方法により31か所の借景庭園の実例を得ることができた。これらの実例よりさらに分析を進めるための指標を定めた。具体的には、三種類の指標を設定した。第一には庭園自体の立地と配置に関する指標、第二には庭園と眺望環境の関連性を示す指標、第三は第一、二をベースに抽出した指標である。

第一の指標は主に庭園所在地域、創立時代、類型、宗教流派、庭園観賞方向、主建築方向、面積などである。主に重森三玲の『日本庭園史大系』に記録されている各庭園の紹介と詳細な実測平面図を参照した。第二の指標は主に景観工学における分析方

3 95か所の実例の中、現存しない例及びひとつの文献にしか認定されていない借景庭園の実例を除き、同時に重森三玲の『日本庭園史大系』において借景庭園と認定された実例を加えると、計32か所の借景庭園を得ることができた。しかし、分析中に竜安寺庭園の仰角が極めて小さいことがわかり、たくさんの文献では竜安寺庭園からは男山及び山上の八幡宮を眺望できているが、本研究では竜安寺を借景庭園として取り扱わない。よって計31個の実例を得た。なかに、平山亮一氏庭園は知覧の三点の似ている借景庭園の代表として取り扱われている。

4 庭園の種類分け方及び種類の名称の方法は一つには限らず、異なる研究者は異なる基準を有する場合が多い。ここ及び後述する関連部分においては、重森三玲の『日本庭園史大系』を参照とする。

法を用いて設定しており、主にカシミール 3D ソフトを用いたシミュレーションを行い<sup>5</sup>、各庭園の実測図と合わせて視点場、眺望対象、眺望距離、標高差、仰角、眺望方向、眺望方向における奥行、見切りなどの指標を設定した。

第三の指標は主に方向性と「大小性指数」の二つのである。これらはすべての指標において最も重要な二つと位置づけた。方向性は借景の方向と庭園観賞方向及び借景の視点場とする建築物の方向の三者間における関係性により決定され、「極強」、「強」、「中」、「弱」の4段階に分けられる。借景方向、庭園観賞方向及び建築物方向の三者が一致する場合、例えば円通寺庭園の場合三者ともに東向きであるため、方向性は「極強」と判定する。庭園観賞方向と建築物方向は完全一致しないが、借景方向と前者のうち一つが一致する場合、例えば大徳寺本坊方丈庭園では庭園観賞方向は南向きと東向きであり、書院建築の方向は南向き、借景方向は東向きであるため、方向性は「強」と判定する。借景方向とほかの二者のうち一者との方向が概ね一致する場合、例えば天竜寺庭園は庭園観賞方向と書院建築の方向がみな西向きであり、借景の方向は南西向きであるため、方向性は「中」となる。方向性が「弱」の場合、すなわち借景の方向とほかの二者とも相違すること、あるいは庭園自体明確な観賞方向を有さないことを意味する。例えば岡山後樂園のような回遊式庭園がその一例である。確かに一つの庭園にとって、三者の関係性はさまざまな要因に規定されていると考えられるため、三者一致を持ってこの庭園が特定の眺望対象に向かって設計されているとは判断できない。しかし庭園の例を集合的に取り扱うことで、方向性の概念が大きく庭園の眺望意識の強弱を反映していることを捉えられるのではないかと考えた。

「大小性指数」は「小中見大」という意匠より得られた概念であり、小さな空間を通してより大きい空間を眺望するときに空間を比較できる効果を表している。第三章の分析においては、「距奥比」という概念を使用している。「距奥比」は大と小の空間の比較効果をも表しており、眺望距離と眺望方向における庭園奥行の間の比によって表わされるものとした。既存の借景に関する様々な概念設定及び借景という概念の使い方からわかるように、所謂本格的な借景とは、一方で自体の簡素化と極小化、もう一方で遠くへの眺望景観、すなわち眺望距離が十分長いことがうかがえる。したがって「距奥比」の概念はまさにこの二面性を捉え得る指標である。「大小性指数」は「距奥比」と仰角の積をとった値であり、仰角の視覚上の影響を考慮したものとして設定した。実際、「小中見大」の「大」というのは距離が遠いということだけではな

5 カシミール 3D シミュレーションは地形分析ソフトに基づいているため、現実状況との誤差が存在し、例えば地上の植生に影響されることがある。分析過程においてはこの点を十分に認識し、シミュレーションと同時にほかの資料を参考に、極力誤差を避けるようにした。

く、眺望対象の大小をも表しており、例として、人々がよく借景を「雄大」と表現することからもわかる。眺望対象の大小が視覚上で体験される代表は仰角である。よって、本章での研究分析においては、「大小性指数」という指標を使った。計算式は以下である：「大小性指数」=仰角×視距離/奥行き

もうひとつの指標は前述した「指摘回数」，すなわち 63 件の文献において借景庭園と認定された回数である。この指標は多数の研究者による借景庭園に対する判断を大きく反映したものである。たとえば前述の三つの典型例は「指摘回数」が一番高かった例であるため、一般的に多数の研究者が共通に認識している借景庭園といえる。

## 2-2. 一般的特徴

以上の各指標を用いて、頼久寺庭園を例に分析過程を説明する。『日本庭園史大系』の記録によると庭園は岡山桃山時代に造営された。臨済宗永源寺派に属す枯山水庭園であり、面積はおよそ 197 坪，山麓に位置し、庭園観賞方向は南向きと東向きであり、主建築の方向は南向きで、借景対象は愛宕山である。次にカシミール 3D のシミュレ

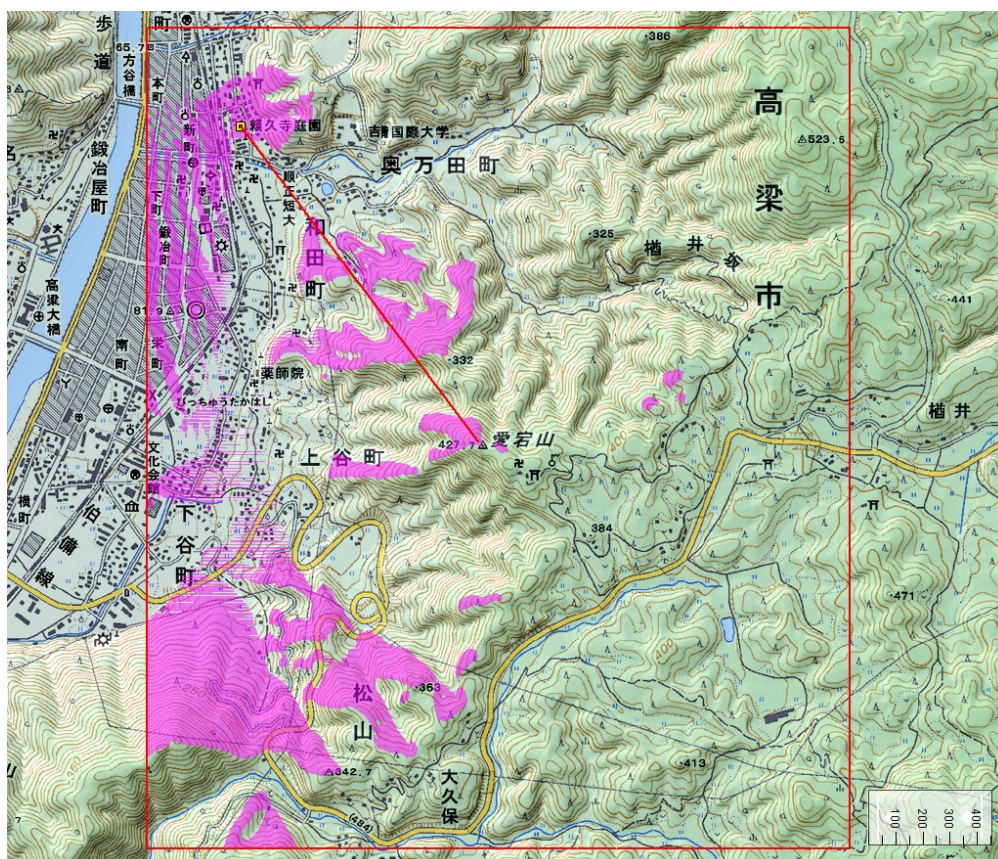


図-2 頼久寺庭園に関する可視分析

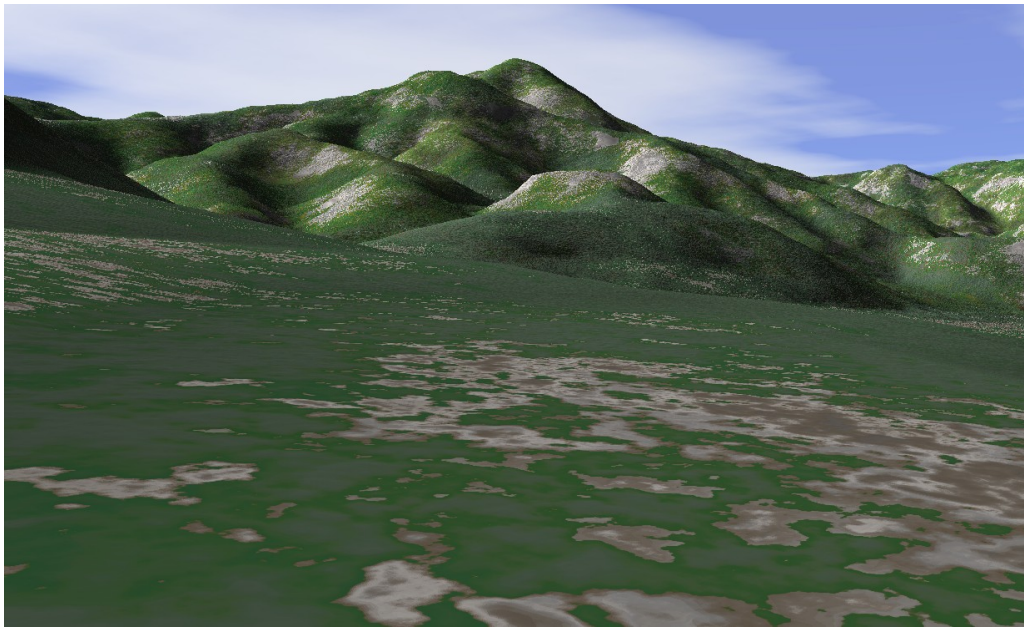


図-3 愛宕山までの眺望のシミュレーション

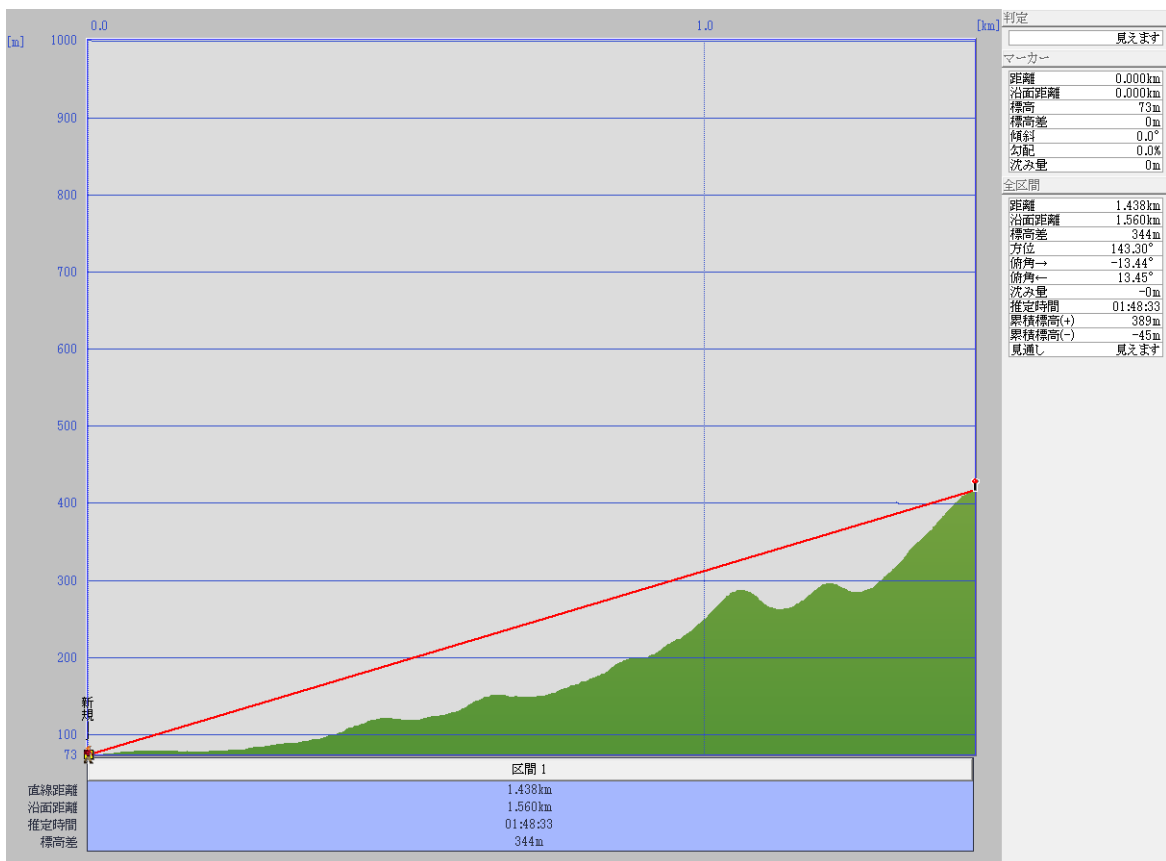


図-4 カシミール 3D における断面分析

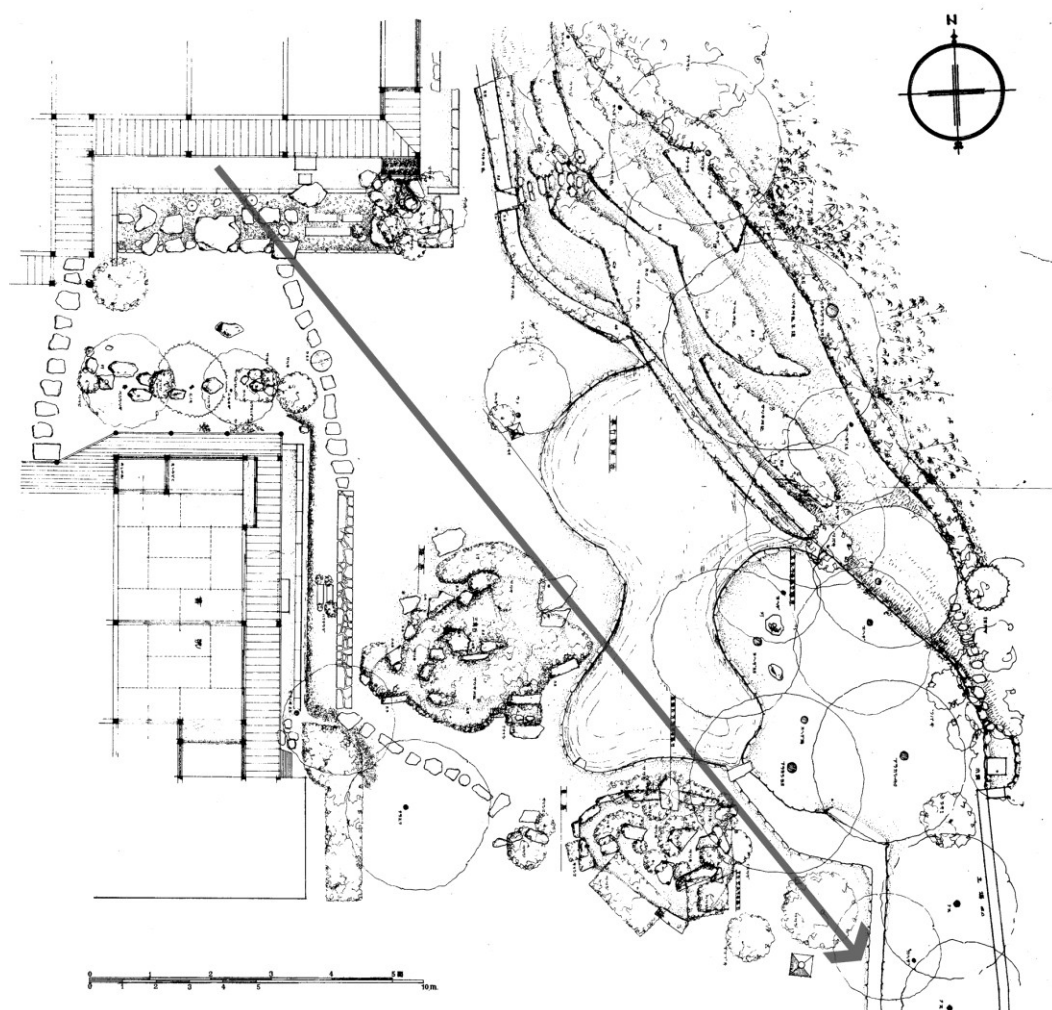


図-5 頼久寺庭園平面図（ベースマップは重森三玲『日本庭園史図鑑』より）

ーションを用いて<sup>6</sup>、眺望の可視範囲、南東向きの愛宕山の眺望風景を計算により得た（図-2）（図-3）。また具体的な眺望方向、視距離、標高差と仰角についても計測した（図-4）。庭園内については眺望方向を実測平面図に落とし込み、眺望方向上の庭園の境界を刈込として特定し、眺望方向における庭園奥行の値を計測した（図-5）。これにより「距奥比」と「大小性指数」を算出した。

同様に、31の庭園に対して、定量的な分析を行った（表-1）。これにより以下のような基本的な特徴が分かった。

重森三玲の分類法を参考に、庭園を池泉回遊、池泉観賞、露地、枯山水及び池泉回

6 カシミアール 3D シミュレーションは地形分析ソフトに基づいているため、現実状況との誤差が存在し、例えば地上の植生に影響されることがある。分析過程においてはこの点を十分に認識し、シミュレーションと同時にほかの資料を参考に、極力誤差を避けるようにした。

表一 1 31 点の借景庭園に関する分析

庭園名	所在	時代	類型	仏教流派	立地	面積坪	庭園觀賞方向	建築正面方向	眺望方向	方向性	視点場	眺望対象(最大仰角)	視距離 km	眺望方向の奥行き m	見切り	標高差 m	「距奥比」	仰角度	「大小性指数」	指摘回数
天童寺庭園	京都	鎌倉	池泉回遊, 觀賞	臨濟宗天童寺派	山麓	1200	西	西	南西	中	書院	嵐山	0.91	34	樹木	334	26.765	20.12	538.506	9
鹿苑寺庭園	京都		池泉回遊	臨濟宗相国寺派	山麓	5400		南	南西	弱	金閣	衣笠山	0.42	83	樹木	72	5.0602	9.79	49.5398	4
慈照寺庭園	京都	室町	池泉回遊	臨濟宗相国寺派	山麓	4200		東	南東	弱	銀閣	銀閣寺山	0.28	58	樹木	112	4.8276	21.59	104.228	3
真珠庵庭園	京都		枯山水	臨濟宗大徳寺派	平地	78	南, 東	南, 東	南東	強	書院	比叡山	7.67	5	刈込	688	1534	5.12	7854.08	3
頼久寺庭園	岡山	桃山	枯山水	臨濟宗永源寺派	山麓	197	南, 東	南, 東	南東	強	書院	愛宕山	1.44	28	刈込	344	51.429	13.44	691.2	3
大徳寺本坊方丈庭園	京都		枯山水	臨濟宗大徳寺派	平地	407	南, 東	南, 東	東	強	書院	比叡山	7.67	8	刈込	688	958.75	5.12	4908.8	23
慈光院庭園	奈良		枯山水	臨濟宗大徳寺派	丘	1350	南, 東	南, 東	東	強	書院	高峰山	12.36	4	刈込	506	3090	2.34	7230.6	14
円通寺庭園	京都		枯山水	臨濟宗妙心寺派	山腹	185	東	東	東	極強	書院	比叡山	5.44	9	刈込	712	604.44	7.45	4503.11	14
正伝寺庭園	京都		枯山水	臨濟宗南禅寺派	山腹	110	東	東	東	極強	書院	比叡山	8.37	15	堀	684	558	4.68	2611.44	5
西翁院庭園	京都		枯山水, 露地	浄土宗	丘	71	北, 西	西	西	強	書院(反古庵)	愛宕山	14.6	7.5	刈込	840	1946.7	3.29	6404.53	3
孤篋庵庭園	京都		枯山水	臨濟宗大徳寺派	平地	471	南, 西	南	南	強	書院	船岡山	0.42	10	刈込	13	42	1.77	74.34	3
西江寺庭園	愛媛	江戸初期	枯山水	臨濟宗妙心寺派	山麓	124	北, 東	北, 東	北東	極強	書院	船岡山	0.2	18	刈込	37	11.111	10.38	115.333	1
天然図面亭庭園	滋賀		露地		平地	145	北, 東	東	南東	中	茶室	三上山	12.64	13	刈込	334	972.31	1.51	1468.18	3
成就院庭園	京都		池泉觀賞	法相宗	山麓	180	北	北	北	極強	書院	湯屋谷	0.31	24	刈込	64	12.917	11.79	152.288	10
甘棠館庭園	福井		池泉回遊, 觀賞		平地	950	南, 西, 北	南, 西	南西	強	書院	野坂岳	4.93	18	低木	899	273.89	10.33	2829.27	1
修学院離宮上御茶屋庭園	京都		池泉回遊		山腹	15000	北, 西	北, 西	北西	中	隣雲亭	十三石山	7.92	82	刈込	342	96.585	2.47	238.566	10
岡山後楽園	岡山		池泉回遊		平地	40200		東	南東	弱	延養亭	箕山	2.03	275	樹木	142	7.3818	4	29.5273	4
玄宮園	滋賀		池泉回遊		山麓	6300			南	弱	武蔵野	彦根城	0.26	135	樹木	27	1.9259	5.83	11.2281	3
栗林園	香川		池泉回遊		山麓	48946			西	弱	講武樹	稲荷山	0.37	170	樹木	120	2.1765	18.03	39.2418	2
平山亮一氏庭園	鹿児島		枯山水		山麓	84	北, 東	北	北東	強	書院	母ヶ岳	2.69	11.5	刈込	385	233.91	8.13	1901.71	1
大通寺含山軒庭園	滋賀	江戸中期	池泉觀賞, 枯山水	真宗大谷派	平地	470	北, 東	東	東	強	書院(含山軒)	伊吹山	13.03	21	樹木	1278	620.48	5.61	3480.87	2
柴屋寺庭園	静岡		池泉觀賞	臨濟宗妙心寺派	山麓	92	北, 西	北, 西	北西	極強	書院	天柱山	0.97	19	樹木	369	51.053	20.85	1064.45	2
穴太寺庭園	京都		池泉觀賞	天台宗	平地	252	南, 西	南, 西	西	強	書院(向月亭)	丁塚山	1.74	21	低木	240	82.857	7.86	651.257	1
菅田庵庭園	松江	江戸末期	露地		山腹	200	南, 東	南	南東	中	書院	星上山	12.97	9	刈込	403	1441.1	1.78	2565.18	2
吉水園	広島		池泉回遊		山腹	710		南, 西	南東	中	中島	百々山	1.08	21	刈込	341	51.429	17.59	904.629	1
無隣庵	京都		池泉回遊, 觀賞		平地	950	南, 東	東	東	強	書院	東山	1.52	43	樹木	271	35.349	10.11	357.377	11
対龍山荘	京都		池泉回遊, 觀賞		平地	1354	東	東	東	極強	書院	東山	1.24	28	樹木	256	44.286	11.68	517.257	6
依水園	奈良		池泉回遊, 觀賞		平地	2800	南, 東	南, 東	東	強	書院	春日山	2.58	56	樹木	393	46.071	8.64	398.057	5
平安神宮庭園	京都	明治	池泉回遊		平地	6100	南, 東	南, 東	南	弱	橋殿	東山	1.28	35	樹木	139	36.571	6.19	226.377	2
碧雲荘	京都	大正	池泉回遊, 觀賞		平地	3100	南	南	東	弱	待月軒	東山	0.99	52	樹木	231	19.038	13.14	250.165	3
芦花浅水荘	滋賀		池泉觀賞		水辺	527	東	東	北東	中	書院	三上山	14.61	15	築山	329	974	1.29	1256.46	3



遊と池泉観賞の間における回遊観賞など五種類に分けた<sup>7</sup>。池泉回遊及び回遊観賞式庭園の境界は主に高く大きな樹木が多いが、露地、枯山水式庭園の境界は低い刈込が多い。同時に、池泉回遊式庭園の方向性はおよそ弱く、五種類の中で最も弱い、枯山水式庭園の方向性はおよそ最も強いといえる。そのほか、ほぼすべての枯山水式庭園は臨済宗寺院に属する。眺望距離と庭園面積の分布状況においては、まず全体としては小面積の庭園が多くその眺望距離は多様である傾向にあるが、方向性が比較的弱い池泉回遊式の庭園はおよそ面積が大きく、同時に眺望距離が小さい傾向が強く、これらの庭園はおよそ樹木を境界としている（図-6）。高く大きな樹木を境界としている回遊観賞式庭園においても相似する特徴を持っている。というのも、境界の遮蔽性が比較的強いため、距離が遠いもしくは仰角が低い山は眺望することが出来ないからである。したがって樹木を境界としている庭園は、仰角が比較的大きく、「距奥比」が比較的小さい。一方で刈込を境界としている庭園はその反対である（図-7）。これらの基本的な特徴は日本庭園の特徴と合致することが出来る。

仰角の分布としては、全体的に明確な分布の傾向はない。1度から22度の間に分散

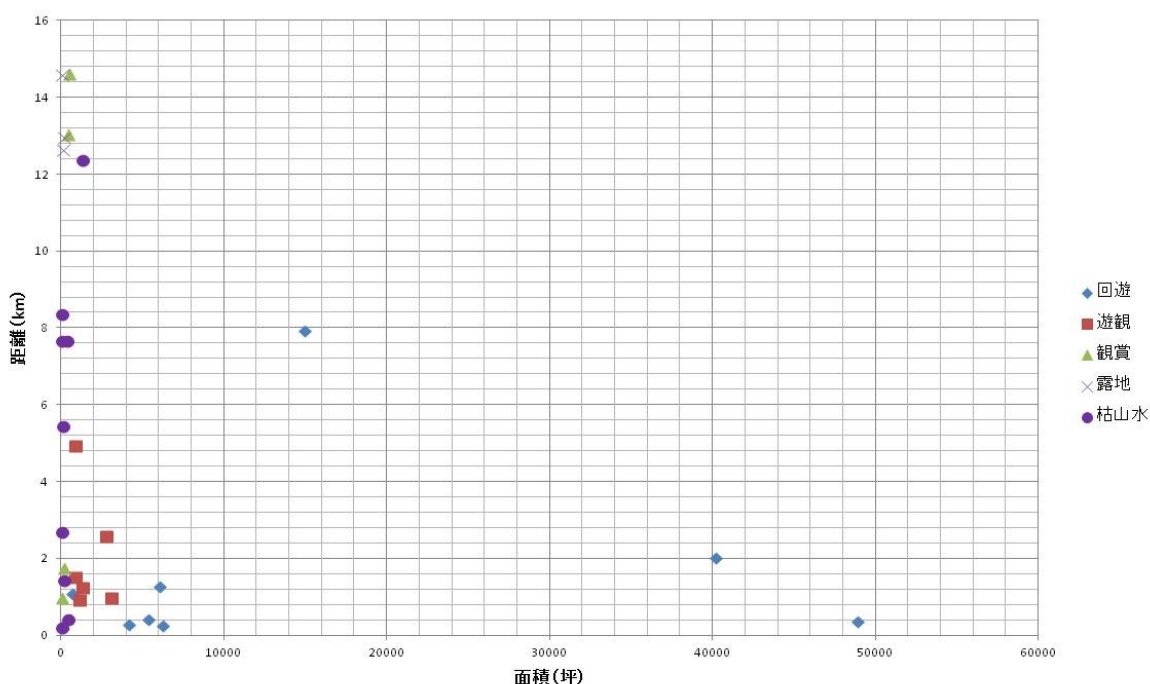


図-6 庭園類型ごとの庭園面積と眺望視距離の関係

7 いわゆる回遊観賞は本研究の便宜上設定された種類であり、重森三玲の研究の中にはあらわれていない。既往研究においても存在しない。例えば天竜寺庭園無隣庵のような庭園の場合、重森三玲の研究では池泉回遊の種類に分類される。しかし実際には、庭園景觀に面している主建築が明確な方向性を有し、大型の池泉回遊庭園と比べると、一定の定視観賞式的特徴を示している。

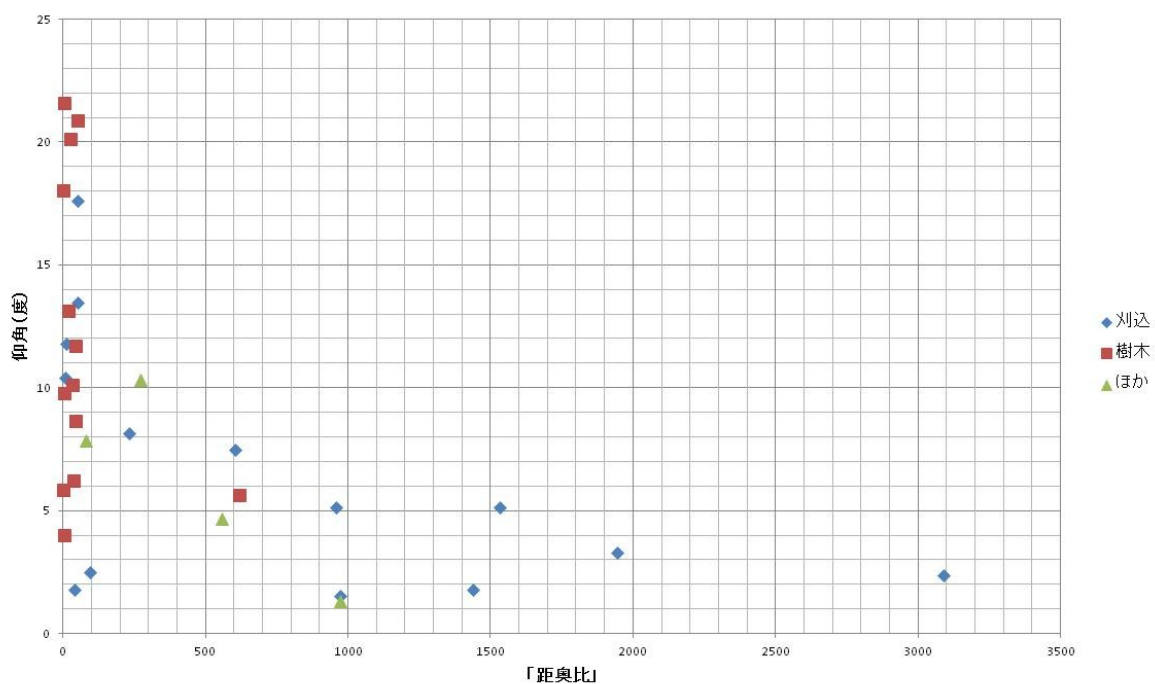


図-7 庭園境界ごとの「距奥比」と仰角の関係

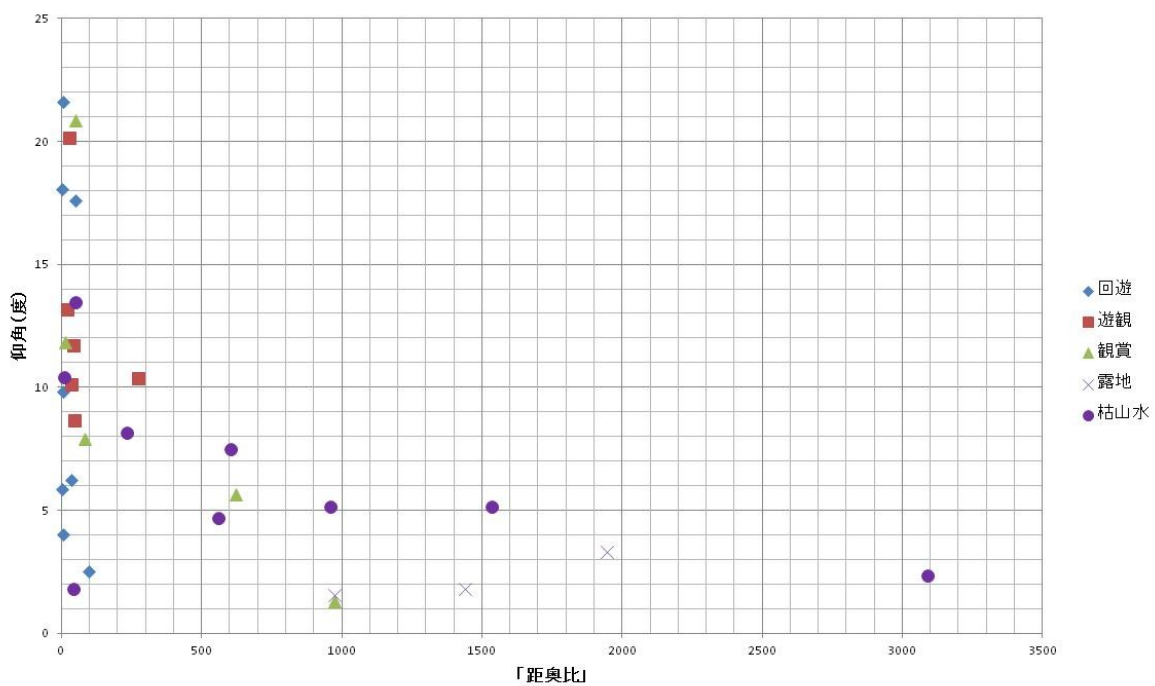


図-8 庭園類型ごとの「距奥比」と仰角の関係

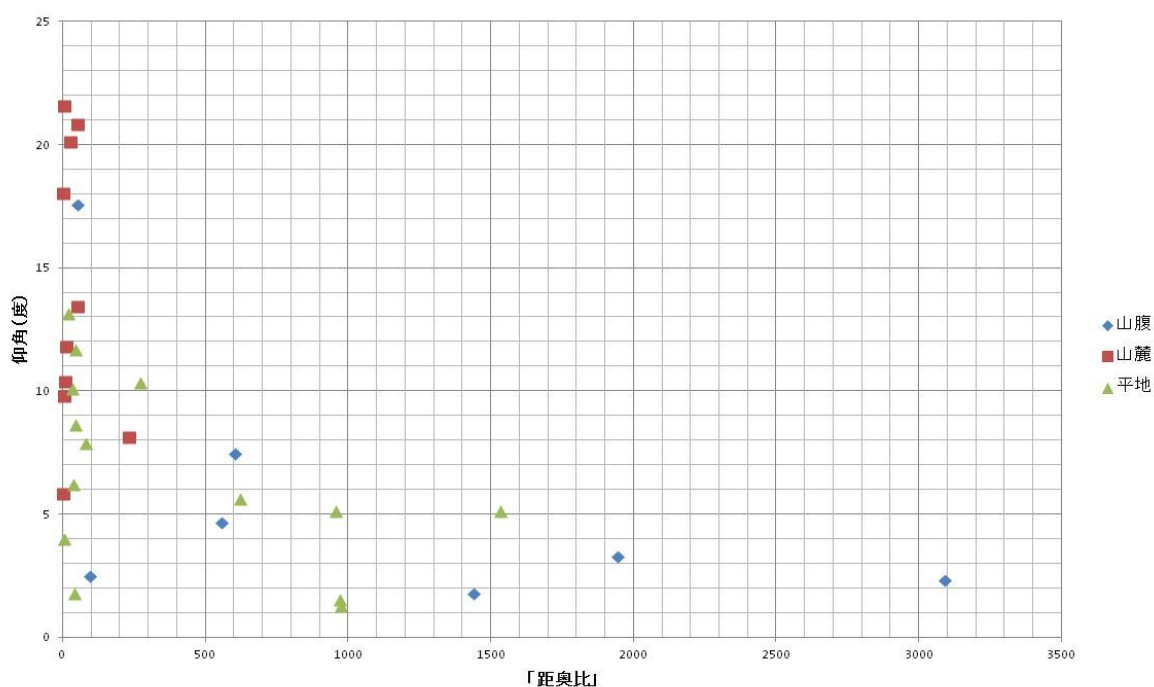
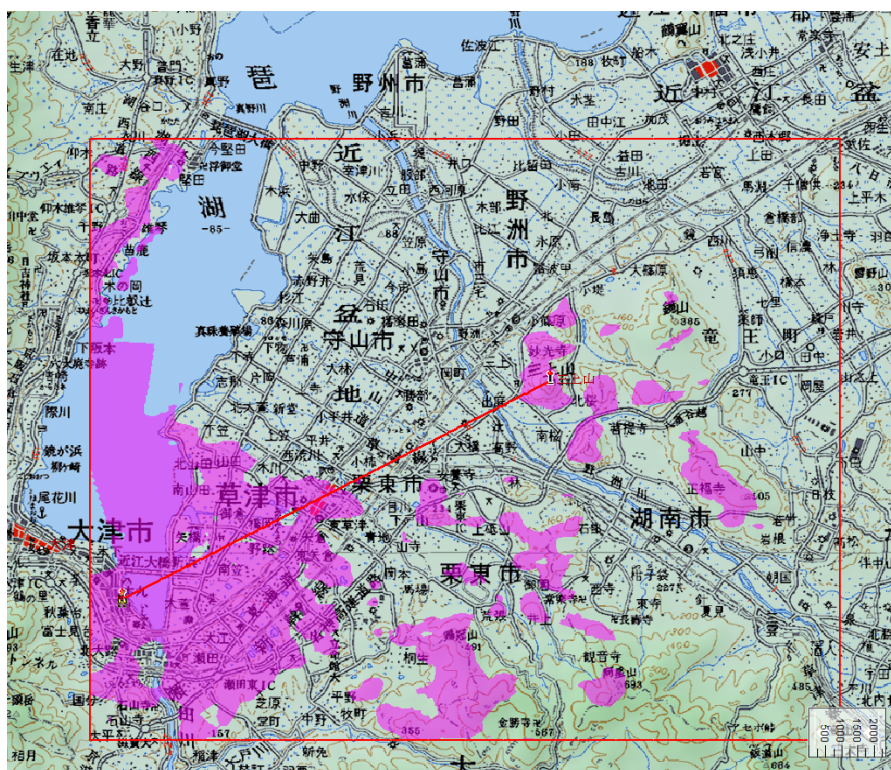


図-9 庭園立地ごとの「距奥比」と仰角の関係

している。仰角と「距奥比」においては反比例的な関係が存在し、距離が大きくなるにつれ仰角が小さくなるという傾向が指摘できる。「距奥比」の全体的な分布としては、おおよそ 300 以下であり、300 以上のものは主に方向性が比較的強い庭園、すなわち露地、枯山水式庭園にみられる（図-8）。方向性が弱い庭園、すなわち池泉回遊式を代表とする庭園は、「距奥比」の値が非常に小さく、一方で仰角は大きい、同時に山腹に位置する庭園においては「距奥比」が比較的大きい例が多数みられる（図-9）。理由としては山麓に位置する庭園は山林の環境にあり、山に近く、眺望距離が比較的小さく、したがって仰角は相対的に大きい。ところが山腹に位置する庭園の場合、例えば円通寺庭園、正伝寺庭園などは、庭園と眺望対象の間にスケールの大きなコンケープ地形があることで、比較的低い仰角の状況においても遠距離の借景が周辺環境に妨げられないことを保証している。実際、多くの平地に位置する庭園の眺望距離は比較的小さく、したがって比較的大きい仰角が現れる場合もあるが、天然図画亭庭園、芦花浅水荘、真珠庵庭園、大徳寺本坊方丈庭園、大通寺含山軒庭園など 5ヶ所の庭園は比較低大きい「距奥比」を持つ。この 5ヶ所の庭園には特異的な性格を持っており、天然図画亭庭園（図-10）、芦花浅水荘（図-11）の二つの庭園は水辺に位置し、庭園と眺望対象の間に巨大な琵琶湖があるため、視覚上巨大なコンケープ地形を形成していることになる。よって仰角が極めて小さいにもかかわらず阻害されて



図一 10 天然図画亭庭園の借景



図一 11 芦花浅水荘に関する可視分析

いない。大通寺含山軒庭園の特徴は、眺望対象としての伊吹山の海拔が極めて高いことである。真珠庵庭園，大徳寺本坊方丈庭園については、『都林泉名勝図会』の中で描かれていた場面を現代では見ることが出来ない。江戸時代に大徳寺が位置していた郊野はすでに近代化した都市によって占拠され、借景も遮られてしまった。実際には

相当数の庭園が真珠庵庭園、大徳寺本坊方丈庭園と似たような状況にあると考えられ、庭園と眺望対象の間はコンケープの地形ではなく、本来の低仰角かつ遠距離の借景が周辺環境の変化及び都市化の進展過程において消失してしまったのである。

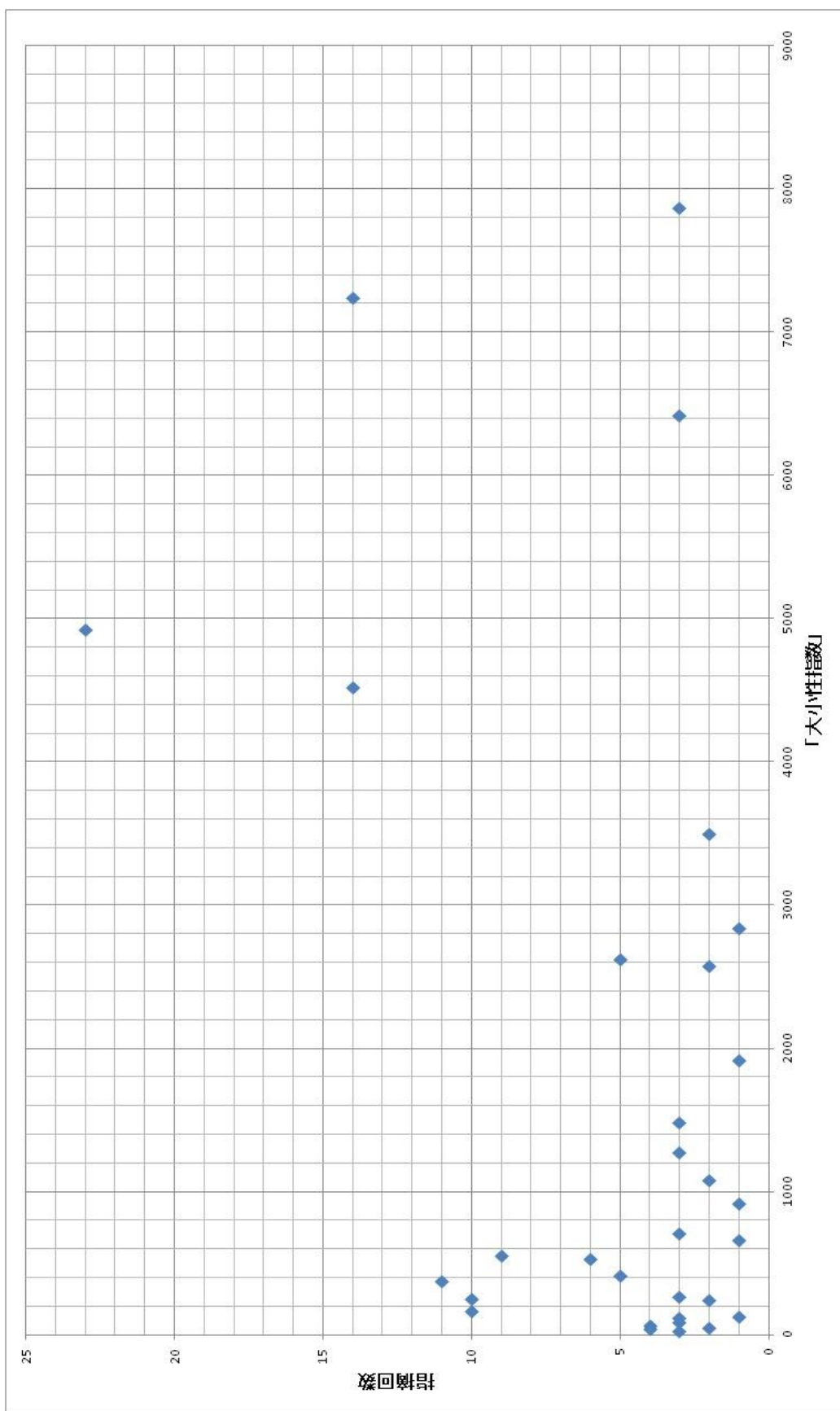
以上のことから、コンケープ地形の保全が借景の存続においての重要な意義をもつことを確認出来た。

### 2-3. 「大小性指数」について

前述の分析のように、「大小性指数」は借景庭園における「小中見大」という意匠を評価する重要な指標である。

「大小性指数」と指摘回数との関係においては、指摘回数が最大の庭園らは確かに「大小性指数」の値も比較的大きいが、量的な相関関係としては明瞭ではないといえる(図-12)。考えられる重要な要因は、指摘回数は様々な要素の影響をうけるため、単独の要素との関係は明確ではないことと、庭園自体の知名度にも関係することがあげられる。その典型例は真珠庵庭園と大徳寺本坊方丈庭園である。この二つの庭園は場所が近く、眺望の構成もほぼ一致し、真珠庵庭園の「大小性指数」の値は大徳寺本坊方丈庭園より大きいにもかかわらず、方丈庭園の歴史における知名度が極めて高いため、両者の指摘回数は大きく異なる。したがって指摘回数の値は参考にとどめるべきであるといえる。

一方「大小性指数」の値と庭園の方向性の間には明確な関係がみられる(図-13)。比較的高い「大小性指数」の値を有する庭園の方向性は「極強」, 「強」, その次に方向性が「中」の庭園であり、方向性が「弱」の庭園の「大小性指数」が一番小さいという結果であった。同時に、方向性が「弱」の庭園の指摘回数の値もおおむね小さい傾向にあり、指摘回数が5回以上の庭園は方向性が「弱」のものは存在しない。また、「大小性指数」の値が比較的大きい庭園の類型は露地、枯山水式であり、池泉回遊式の庭園の「大小性指数」はいずれも比較的小さい(図-14)。庭園の所属においては、比較的大きい「大小性指数」の値と指摘回数の値を有する庭園はおおむね寺院庭園とくに臨済宗の庭園に属しており、加えて寺院庭園の「大小性指数」の値は全体的に大名庭園及びほかの種類庭園より高い(図-15)。庭園立地の観点においては、「大小性指数」と指摘回数の値において比較的大きい庭園は山腹に位置する 경우가多く、山麓に位置する庭園の値は小さいことが多い(図-16)。庭園境界においては、両者の値が最大の庭園は刈込を境界としており、樹木を境界としている庭園の「大小性指数」の値は全体的に小さい(図-17)。



図一 1 2 「大小性指数」と指摘回数との関係

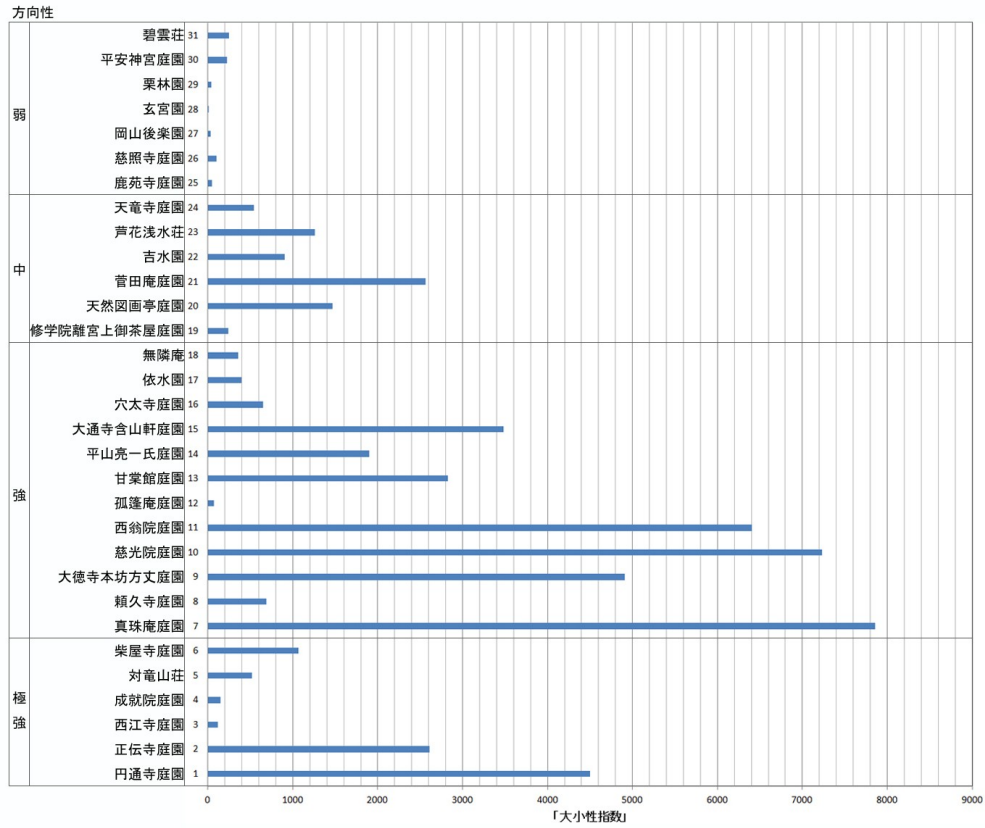


図-13 庭園方向性と「大小性指数」の関係

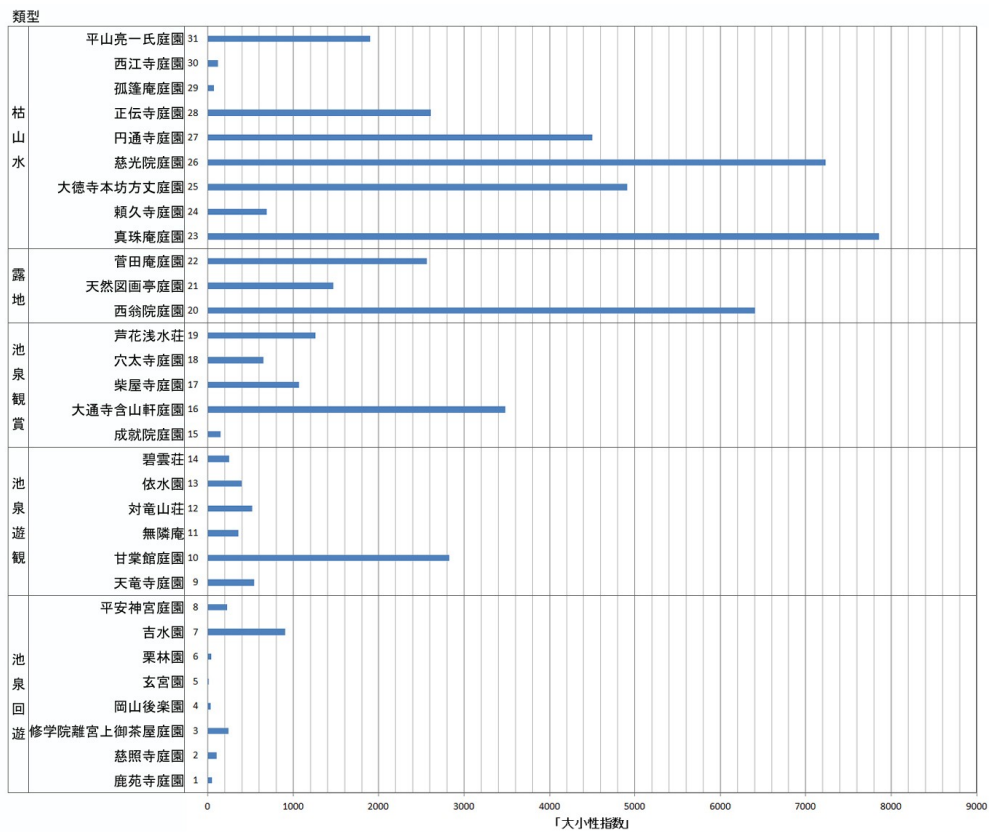


図-14 庭園類型と「大小性指数」の関係

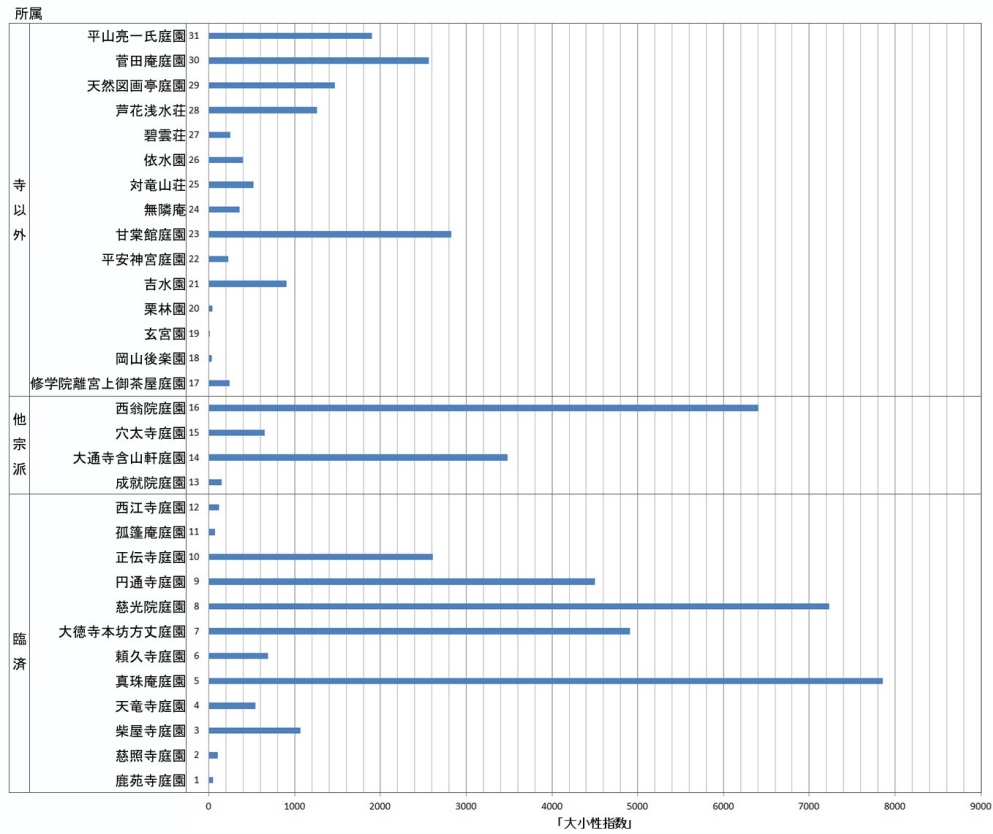


図-15 庭園所属と「大小性指数」の関係

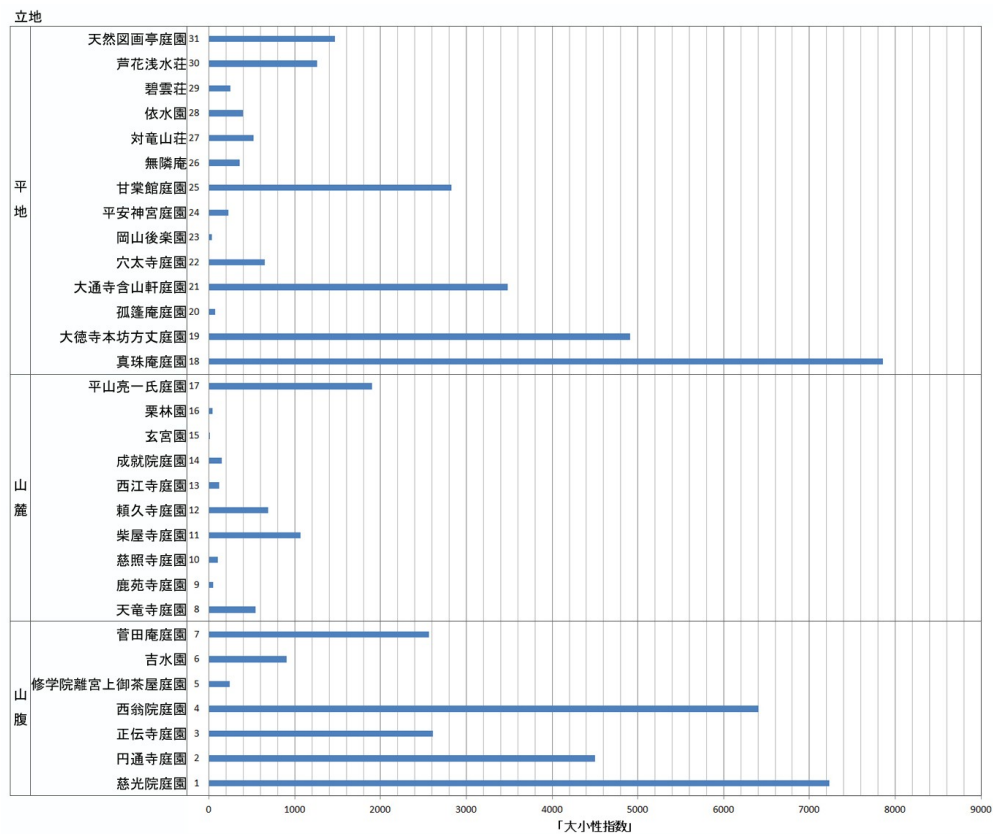


図-16 庭園立地と「大小性指数」の関係



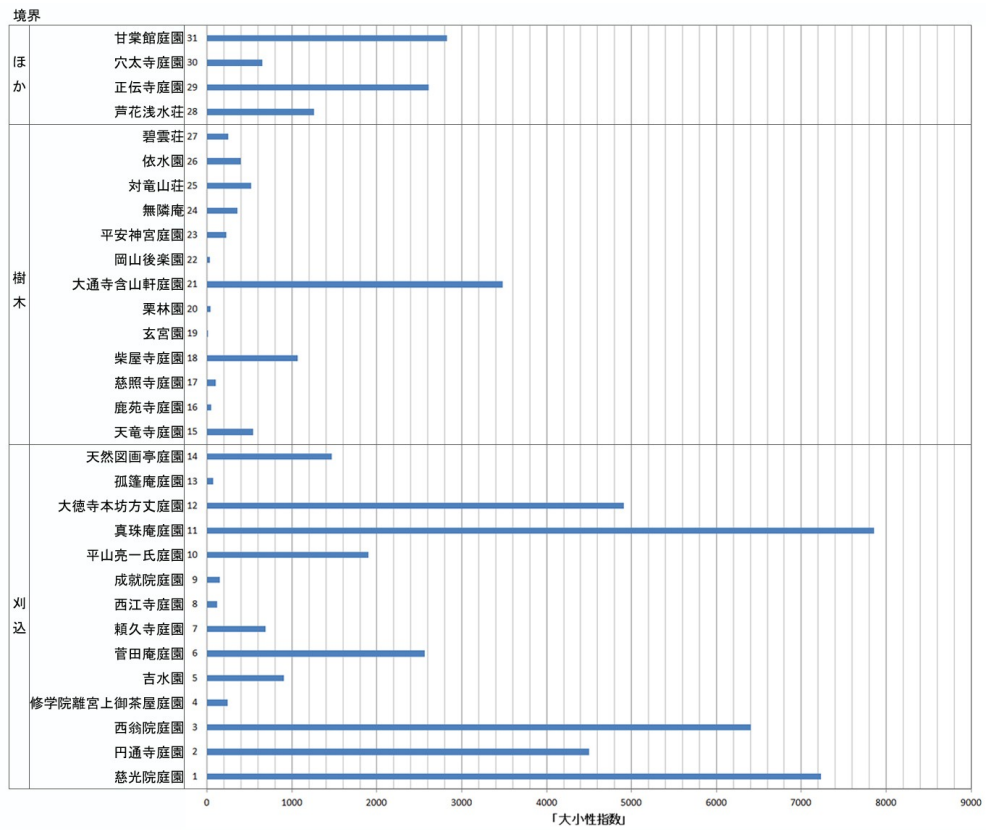


図-17 庭園境界と「大小性指数」の関係

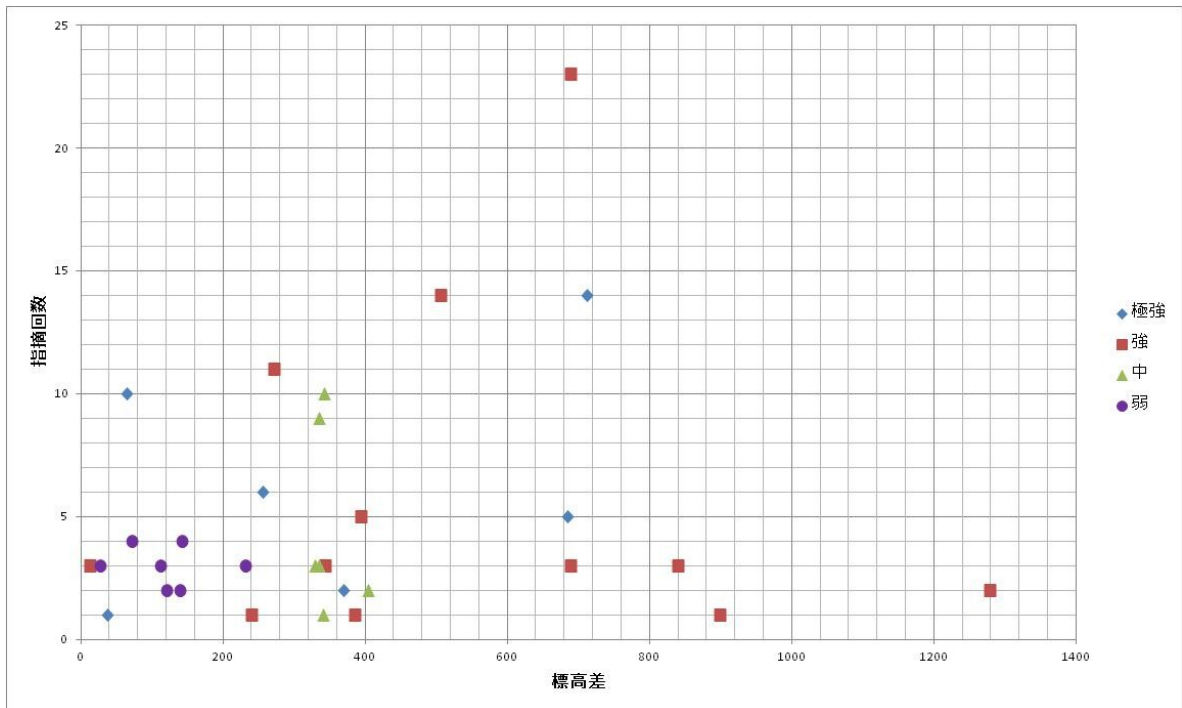


図-18 庭園方向性ごとの標高差と指摘回数との関係

したがって、高い「大小性指数」の値を有する庭園は以下のような特徴があるという結論が導ける：強い方向性を有し、枯山水様式、寺院に所属し、山腹に位置し、刈込を境界としている。

前述のように、方向性という概念は庭園設計における外景への眺望意識を反映しているものとして設定した。円通寺庭園，正伝寺庭園，西翁院庭園，対竜山荘など方向性が非常に強い庭園においては、庭園の借景は無意識のうちに受動的に出来たものではなく、また庭園設計施工が完成したのちに添付された装飾物でもなく、設計当初から意識的に借景対象の存在を認識している可能性が高い。借景庭園の存在は庭園の設計乃至は場所選定において大きな影響を及ぼしているといえる。とくに対竜山荘の場合は、庭園の名称からも眺望に対する能動的な意識が伺える。仮に眺望環境のみを考慮すると、「大小性指数」は簡略化することが出来、この値の計算方法は眺望距離と仰角の積をとることである。この値は眺望距離が空間上における尺度を反映し、この尺度は眺望距離と仰角の両者と比例的関係にある。また、この値と庭園の方向性も強い関係が存在することがわかる。比較的大きい値を有する庭園は方向性が一番強い庭園である場合が多く、例としては大通寺含山軒庭園，西翁院庭園，正伝寺庭園などが挙げられる。同時にこの関係は庭園の方向性と眺望の標高差に直接反映される（図-18）。よって、庭園設計における借景意識と眺望対象の大小、「大小性指数」及び反映された「小中見大」意匠の間における関係性を捉えることができた。

したがって、日本庭園の設計における借景に関しては以下の傾向があるといえる：借景庭園は主に庭園と眺望環境間の関連性に基づいて「大小性指数」の値が大きくなるように設計され、「小中見大」の対比効果による視覚的および空間的体験を期待するものである。

### 3. 眺望意識

前述の方向性及び方向性と「小中見大」意匠の関連性からわかるように、借景庭園の多くは強い眺望意識を背景に設計されている。ここで、山腹と山麓に立地する庭園は庭園の方向と斜面の関係によって大まかに二種類に分けられる。一つの種類は主要な観賞場所とする建築が斜面に対面しており、庭園は斜面と建築の間に設置されている。例えば天竜寺庭園，頼久寺庭園がその例である。もう一種類はその反対で、建築が斜面を背向するように配置され、庭園と斜面の間に設置されている。例えば円通寺庭園，正伝寺庭園，柴屋寺庭園など多くの庭園がこの種類に属する（図-19）。

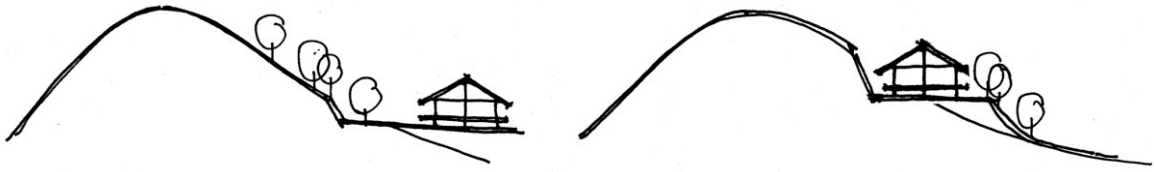


図-19 面山と背山の配置



図-20 天竜寺庭園

山地の自然環境の特性を活かして山沿いの一角を利用して設置されることは日本庭園，特に池泉観賞式庭園の一般的なつくり方である。多くみられる例は天竜寺庭園のように，斜面の手前の下に池を設置し主景観を形成する。斜面はしたがって背景となり，山の泉から引水した滝もしくは象徴的な意味をなす枯滝を斜面に設置していることも多い（図-20）。『日本庭園史大系』に収録されている庭園実測図全般に対して検索をしたが，このようなつくり方は日本庭園の主流の一つといえる。多くの山腹及び山麓に位置する庭園はこのような配置を採用し，80点以上の庭園がこのような配置をしている。一方で円通寺庭園，正伝寺庭園のような山に背向する配置の庭園は非常に少なく，前文で分析したすべての借景庭園の内，10庭園がこのように配置されている。この10ヶ所以外に，『日本庭園史大系』を詳しく検索した上で竜華寺庭園，那谷寺庭園の二つの例が得られた。

表-2 背山庭園に関する分析

庭園	時代	所在	仏教流派	様式	建築と 庭園観	建築正面	建築方向	借景に 対して	対象	眺望 方向	方向	視距離	眺望方 向	仰角	
正伝寺庭園	江戸	京都	臨済宗南	枯山水	180	東	東	塀	借景	比叡山	東	極強	8.37	15	4.68
慈光院庭園		奈良	臨済宗大	枯山水	180	南, 東	南	刈込	借景	山並み(高)	東	強	12.36	4	2.34
円通寺庭園		京都	臨済宗妙	枯山水	180	東	東	刈込	借景	比叡山	東	極強	5.44	9	7.45
竜華寺庭園		静岡	日蓮宗	池泉観賞	90	南, 東	南	刈込, 築							
西江寺庭園		愛媛	臨済宗妙	枯山水	90	北東	北東	刈込	借景	泉森山(推)	北東	極強	5.55	18	7.43
那谷寺庭園		石川	真言宗	書院式露	90	東	東	塀							
修学院離宮		京都		池泉回遊	180		北西(隣)	刈込	借景	山並み(十)	北西	中	7.92	82	2.47
西翁院庭園		京都	浄土宗	露地, 枯	180	西	西	刈込	借景	山並み(愛)	西	極強	14.6	7.5	3.29
成就院庭園		京都	法相宗	池泉観賞	90	北	北	刈込	借景	湯屋谷	北	極強	0.31	24	11.79
柴屋寺庭園		静岡	臨済宗妙	池泉観賞	180	北西	北西	樹木	借景	天柱山	北西	極強	0.97	19	20.85
吉水園	江戸	広島		池泉回遊	180		南西(吉)	刈込	借景	百々山	南東	中	1.08	21	17.59
菅田庵庭園	江戸	松江		露地	180	南, 東	南	刈込	借景	山並み(星)	南東	中	12.97	7	1.78

これら計 12 個の庭園のうち、10 個が借景庭園である(表-2)。よって山に背向する配置は庭園設計時の借景に対する意識と関連すると考えられる。庭園方向と斜面方向の関係に基づいて 10 個の庭園を二種類に分類できる。一つの種類は主建築の方向と斜面が 90 度をなすもので、西江寺庭園と成就院庭園が例として挙げられる。残りの 8 庭園はもう一つの種類に分類され、主建築の方向と斜面が 180 度をなし、すなわち完全に背面に位置することである。第一種類に属する二つの庭園：竜華寺庭園、那谷寺庭園はいずれも借景庭園ではない。前述した方向性の概念をみると、10 個の借景庭園の方向性は強い場合が多く、6 個の庭園の方向性が「極強」に分類されることが分かる。

そのほかにも、10 個の借景庭園の眺望環境に対する分析から、一つの重要な特徴が浮かび上がった：多くの庭園、特に方向性が強いものにおいては、面している眺望対象は所在環境における顕著な象徴性を有する山である。正伝寺庭園及び円通寺庭園の場合、庭園が面しているのは京都府内における最高峰の一つとされている名山—比叡山であることは明らかである。同様に、慈光院庭園は東方向の山々に面しており、西翁院庭園は西方向の山々に面している。一つ考えられる理由として、西翁院は光明寺の敷地の西隅に位置していることから、東側の眺望が制限されていることである。両者にとって山々の景観は各自が所在する環境において獲得可能である一番顕著な眺望景観である。池泉回遊式庭園は全体的に強い方向性を持たないが、修学院離宮上御茶屋庭園は特殊であり、庭園が山腹という独特な処に位置していること、地形によっ



図-21 隣雲亭からの借景

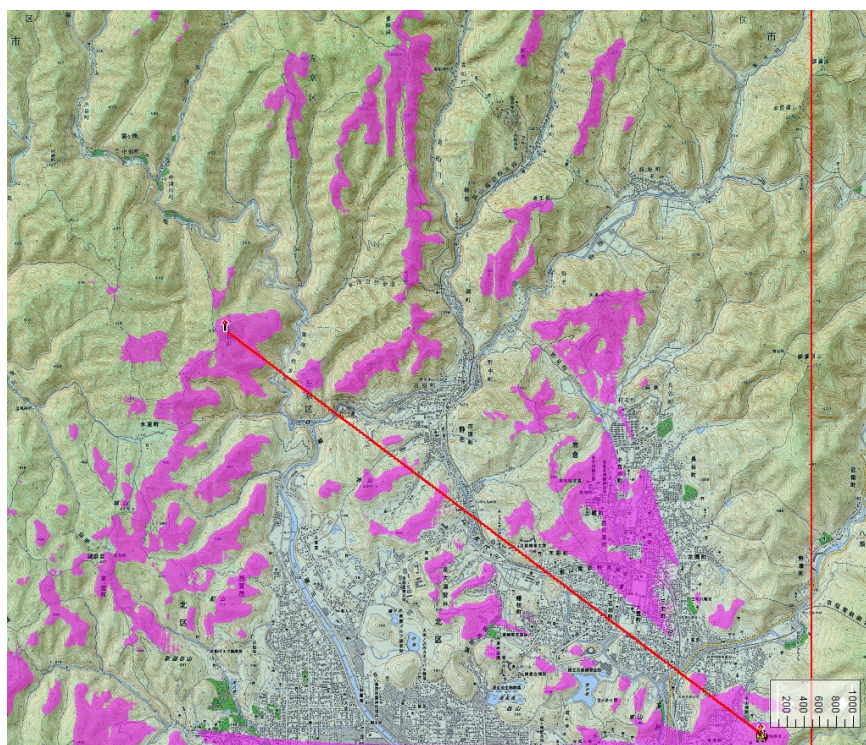


図-22 隣雲亭に関する可視分析

て東、南、北の三方向から包囲されていること、及び西側に大刈込を設置し境界としていることから、総体的に西側への方向性を有する。庭園の内部から、西方向、北西方向へ連なる山々を一望できる。隣雲亭は園内建築の一つであり、借景を觀賞する視点場として特別に設計された（図-21）。可視分析からわかるように、隣雲亭は7.92

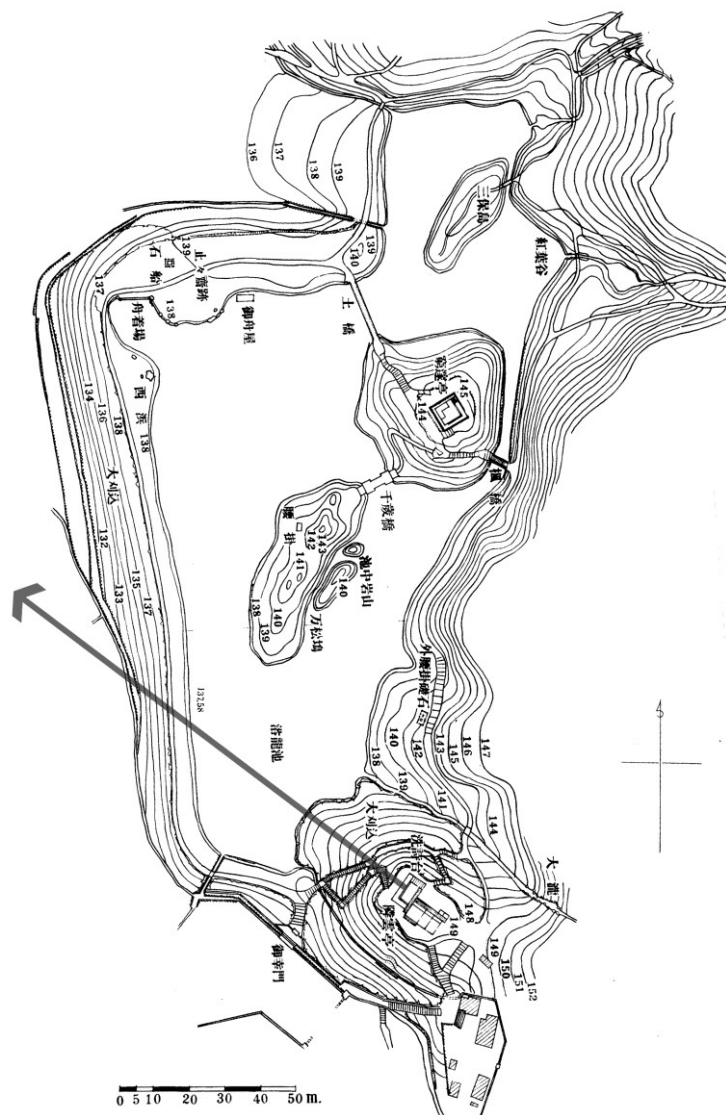


図-23 修学院離宮上御茶屋庭園平面図（ベースマップは森蘊『日本の庭園』より）

キロ離れた十三石山の最高峰にちょうど面しており、十三石山海拔は495メートルであるため、隣雲亭から眺望できる山々の最高地の一つである（図-22）（図-23）。吉水園と修学院離宮上御茶屋庭園においても類似するところがあり、庭園の主な眺望方向は1.08キロ離れた百々山である。このほかにも、西江寺庭園においても似たような特徴をみることができた。西江寺庭園は山麓に位置し、距離が一番近い斜面は庭園の南東側に、庭園観賞方向及び主建築の方向は北東である。庭園は枯山水様式で、大刈込を境界としている。『日本庭園史大系』及びほかの文献が収録している西江寺庭園の眺望の写真からは、庭園正面刈込の境界を越えて庭園正面右手側の山を眺望できて、山の形状が緩曲線であることが伺える（図-24）。可視性分析から、庭園が眺望可能な対象は庭園北東側の支脈であることがわかった。距離は約200メートルであり、仰角は約10度である。しかしながら、より広範囲にわたる可視性分析を行うと、

庭園及び主建築は泉森山という海拔 755 メートルの高い山に面しているということが分かった（図-25）。また、可視性の三次元シミュレーションから、西江寺庭園所在地から泉森山が眺望できることが分かった（図-26）。山の形態においても鮮明な特徴が備わっている。同時に、『日本庭園史大系』に収録されている重森三玲が庭園を実測したときに描いたデッサンにおいても類似する眺望景観が描かれている（図-27）。この形態からも主要な眺望対象は泉森山であることが判断できる。より広範囲



図-24 西江寺の借景（重森三玲『日本庭園史大系』より）

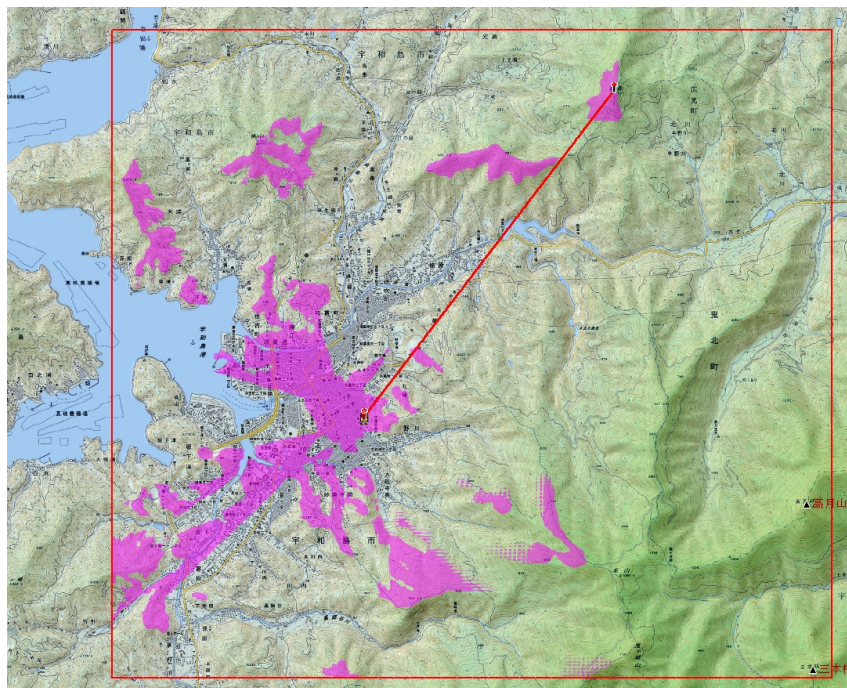


図-25 西江寺庭園に関する可視分析

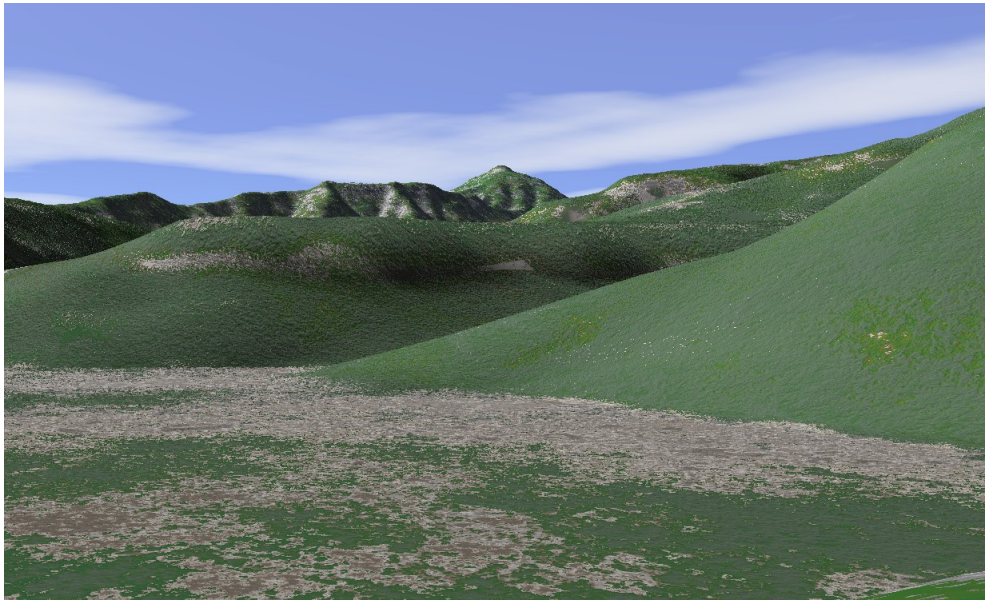


図-26 泉森山までの眺望のシミュレーション



図-27 重森三玲の西江寺庭園に関するデッサン（重森三玲『日本庭園史大系』より）

地域における可視分析からわかるように、西江寺庭園周辺にはいくつかの高山が存在するにもかかわらず、庭園所在地から眺望出来る対象の中では、泉森山が一番高い。もうひとつ考えられる理由として、設計施工当初では、庭園境界の刈込は今のようになく、庭園の借景はランドマーク性を持つ泉森山を主要対象として行った可能性もある。

より顕著な例は以下の二つの庭園、成就院庭園及び柴屋寺庭園である。一つ注意したいのは、日本庭園において、庭園の設置と書院の向きは多くの場合で水源の方向に



大きく影響されることである。水源はおおよそ斜面上を源としていることが多いため、多くの庭園設計において、斜面に寄り添う形で池を設置し、その池を景観中心として、主建築は自然と斜面に対面して設置されることが多い。しかしながら、この二つの庭園は配置におけるこの慣例を破っている。成就院庭園は斜面の西側に位置しているが、書院は東方ではなく北側に面している。よって刈込を境界として北方の谷を借景としている。しかしながら、成就院庭園の例からわかるように、水源の方向は確かに西側の斜面からであり、現に池の入水口は池の南東隅にあるが、書院建築は斜面に面しているのではなく、北側に面していることから、この配置は借景の影響を大きく受けているといえる(図-28)。借景対象の特徴に関しては、可視性分析からわかるように、成就院庭園から眺望されている湯屋谷は庭園が所在している地域環境中唯一の借景対象である可能性が高い(図-29)(図-30)。より典型的な例は柴屋寺庭園である。同じように柴屋寺庭園は斜面の西側に位置し、水源は庭園の東側の斜面から引いているが、慣例とは異なり、現状は水路を使って水源と池を接続している(図-31)。書院建築は池と斜面の間に設置し、完全に斜面を背向するように位置する。同時に、周辺地域の地形及び可視性分析からわかるのは、柴屋寺庭園の正面に位置する借景対象は可視範囲内での最高峰であり、大きな仰角を有する(図-32)(図-33)。この二つの例から、庭園方向と斜面方向及び水源方向が異なる理由は、借景の影響を大きく受けているためといえる。すなわち、庭園方向は借景対象によって選定されている可能性が極めて高いのである。

これらの借景庭園と眺望対象の間の相関関係、及び眺望対象としての山における共通する特徴より、庭園の設計上これらの眺望対象の存在と影響を考慮している可能性が極めて高いと考えることができる。

実際に、山に背向する借景庭園が意識的に周辺地域において象徴性が高い山を借景対象として、比較的強い借景意識を示しているだけではなく、ほかの方向性が比較的強い借景庭園においてもこの特徴が表れている。鹿児島知覧における庭園はこの典型例である。『日本庭園史大系』では3点の類似する知覧の庭園を収録しており、庭園配置及び借景において極めて似た特徴を有する。平山亮一氏庭園を例にとると、庭園は南北二つの山脈に挟まれた街区に位置し、庭園は主建築の北側に設置されている(図-34)。庭園の主要観賞方向と主建築の正面方向はいずれも北向き、より正確には北北西向きである。庭園は大刈込を境界とする枯山水様式であり、刈込を通して庭園北東方約2.69キロ以外の母ヶ岳が眺望出来る(図-35)。興味深いのは、庭園はL字型に設計されており、すなわち主建築正面が面している庭園以外にも、庭園は主建築の東側面にまで延長され、よって庭園に東方向の観賞可能性が付与されている。し

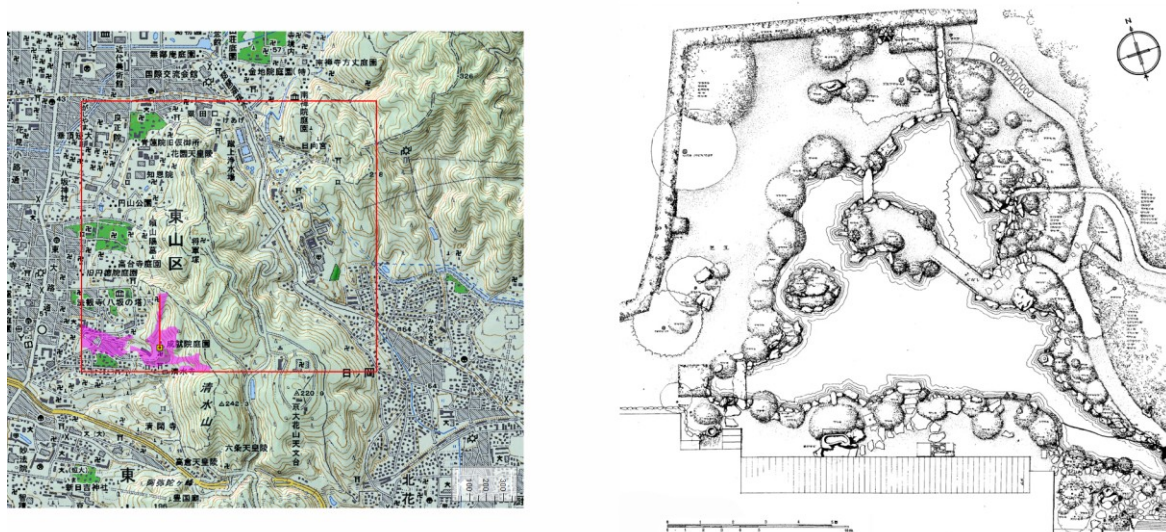


図-28 成就院庭園の立地と平面図（平面図は重森三玲『日本庭園史図鑑』より）

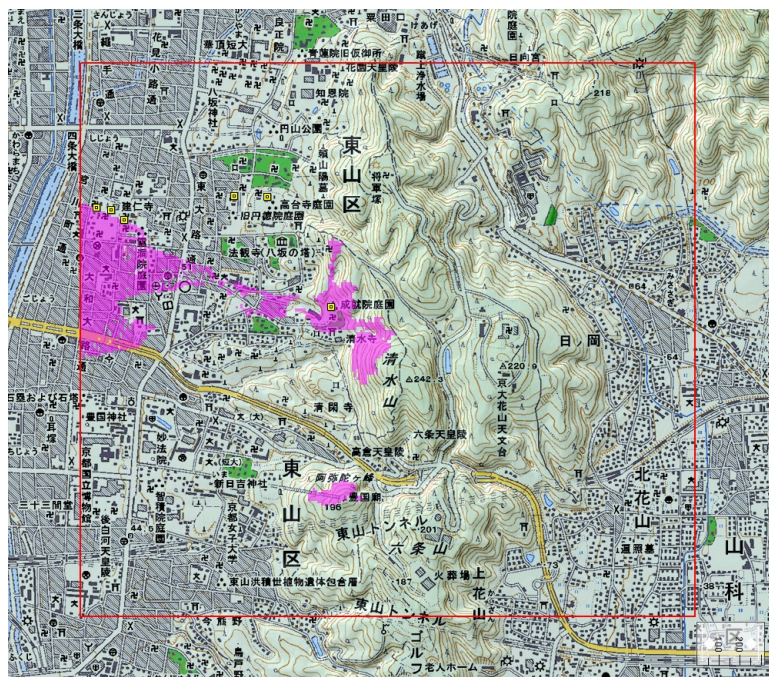


図-29 成就院庭園に関する可視分析

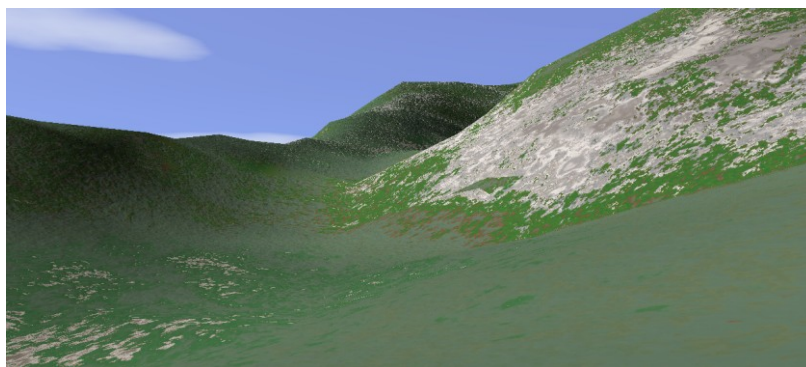


図-30 成就院庭園の借景のシミュレーション

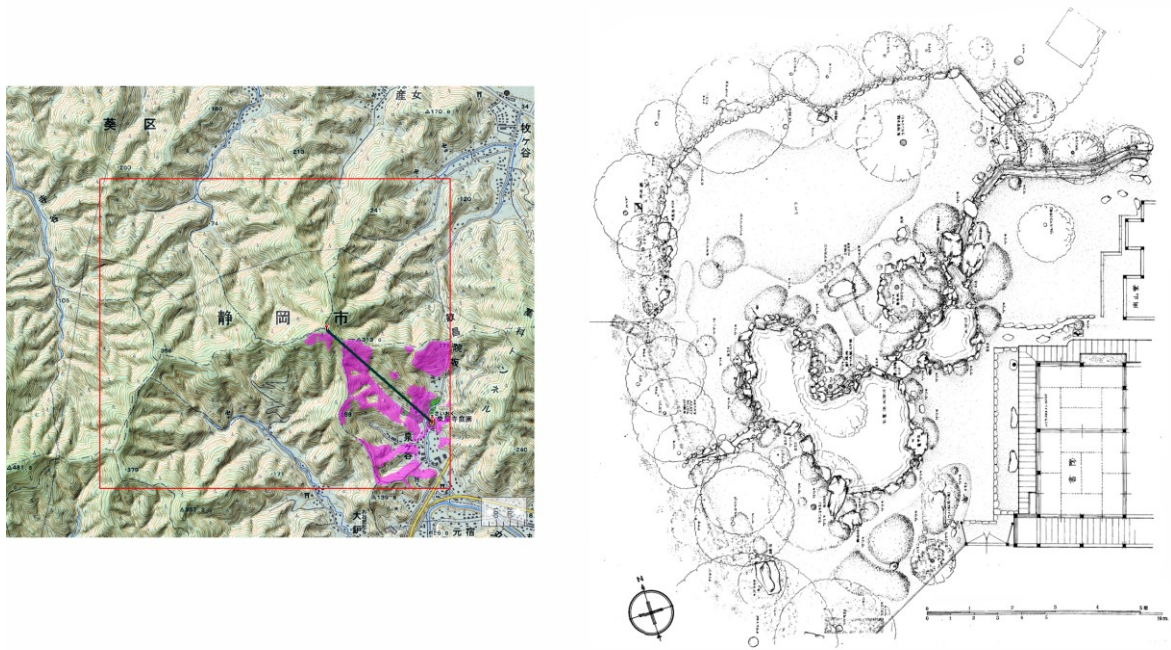


図-3 1 柴屋寺庭園の立地と平面図（平面図は重森三玲『日本庭園史図鑑』より）

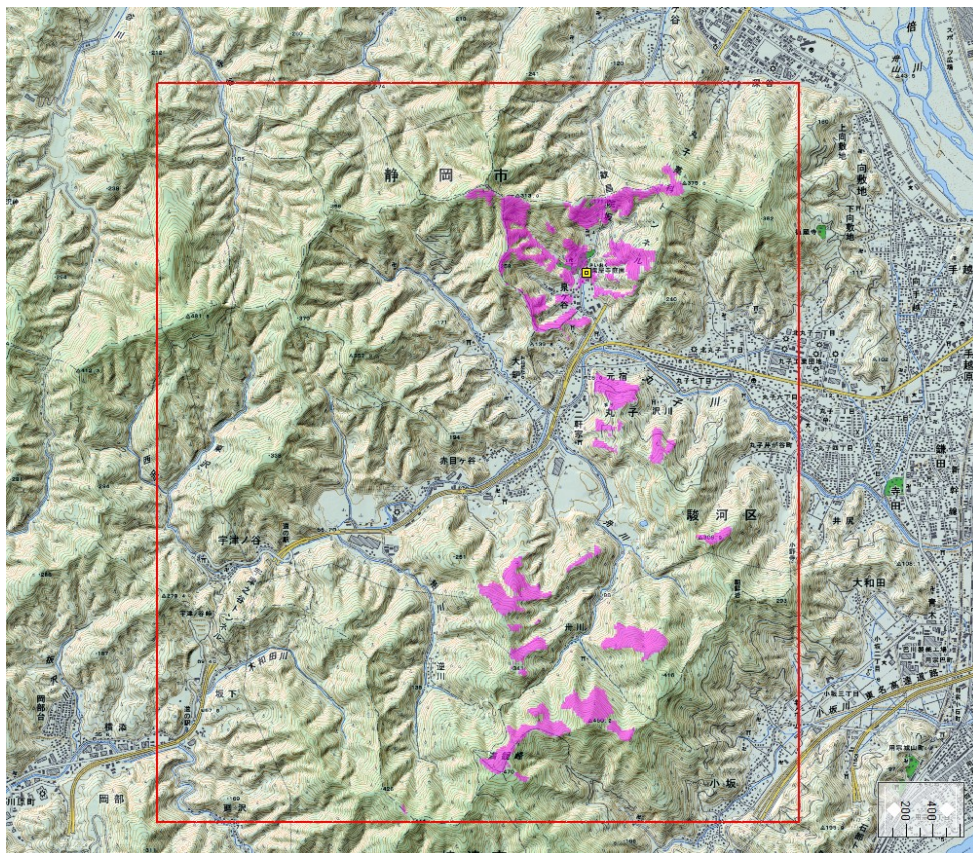


図-3 2 柴屋寺庭園に関する可視分析

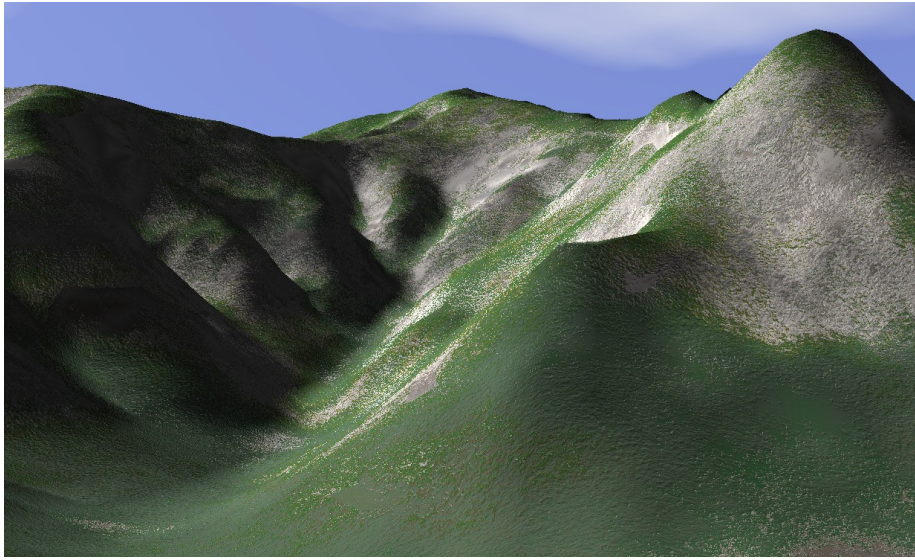


図-33 天柱山までの眺望のシミュレーション

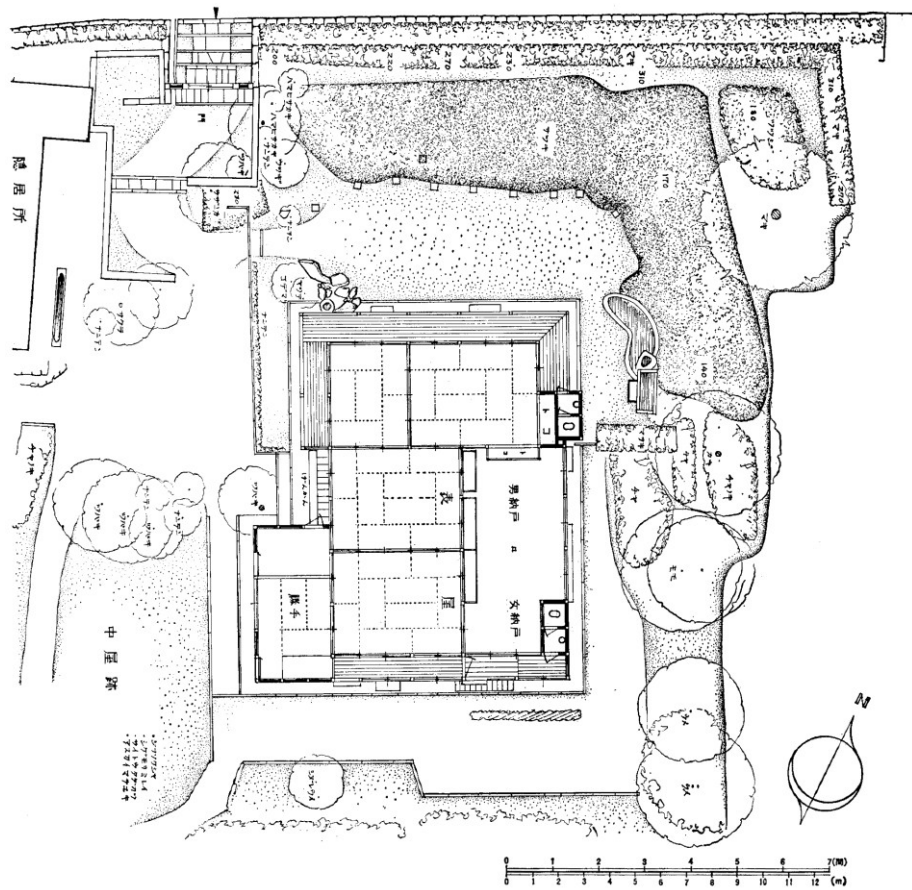


図-34 平山亮一氏庭園平面図（重森三玲『日本庭園史大系』より）



図-35 平山亮一氏庭園の借景

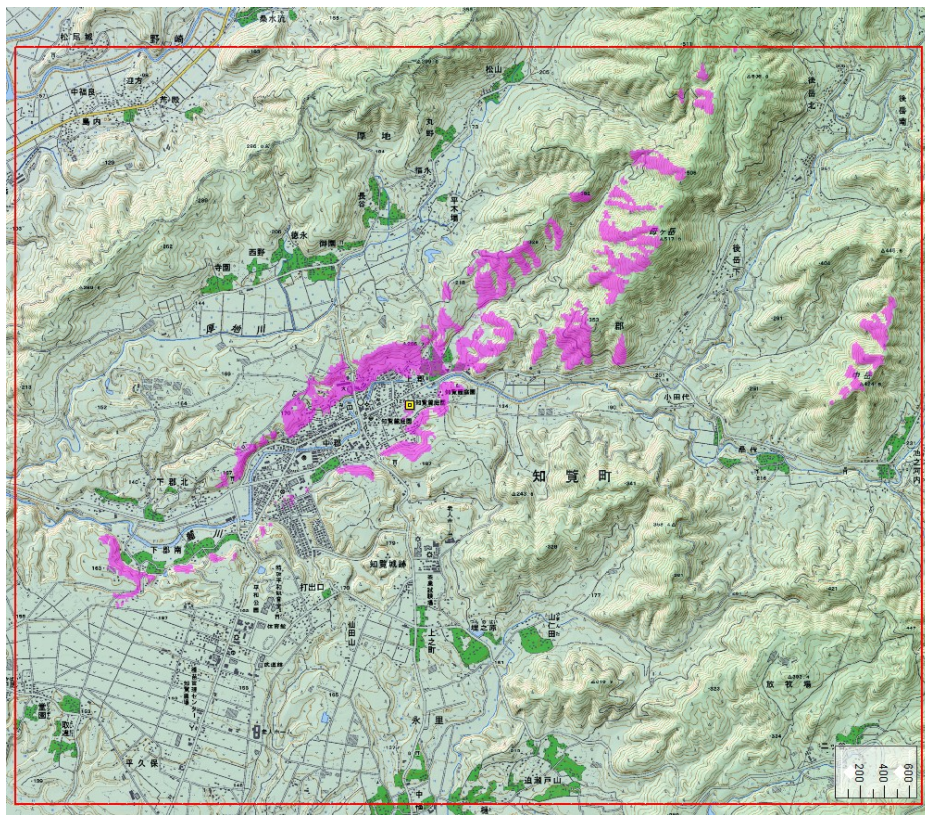


図-36 平山亮一氏庭園に関する可視分析

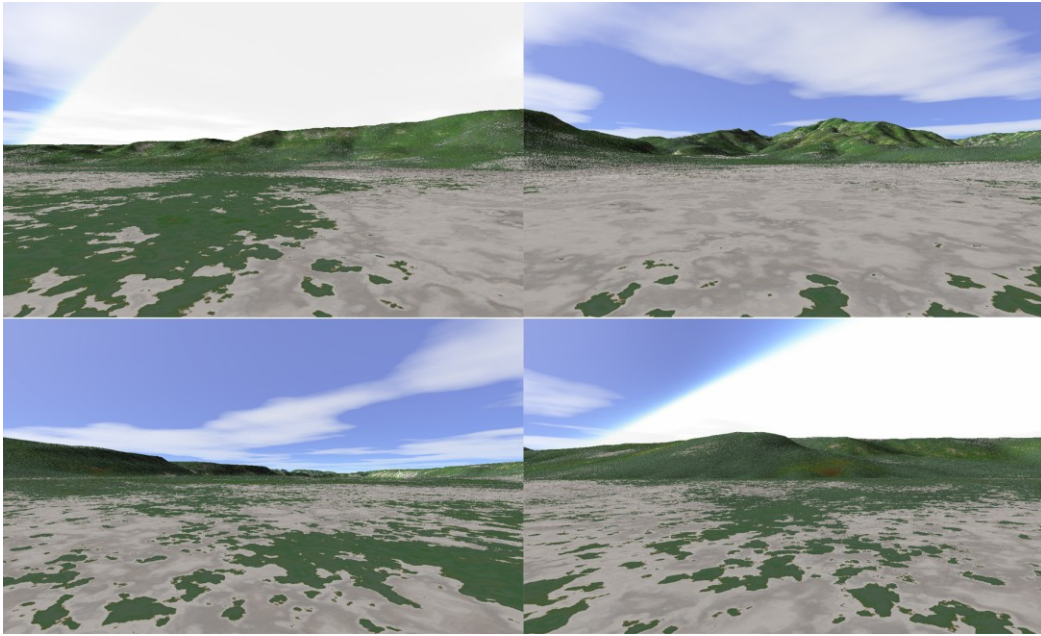


図-37 平山亮一氏庭園から四方の山並みまでの眺望のシミュレーション

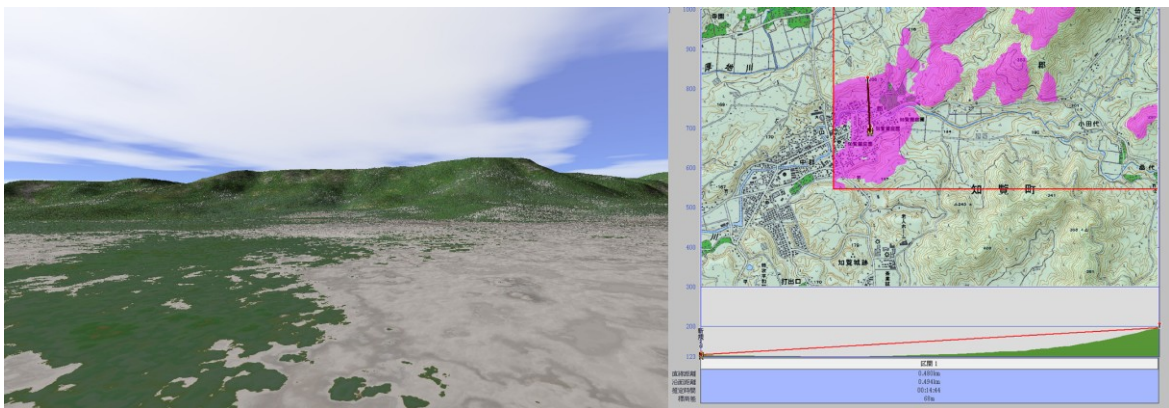


図-38 北の山の眺望に関する可視分析とシミュレーション

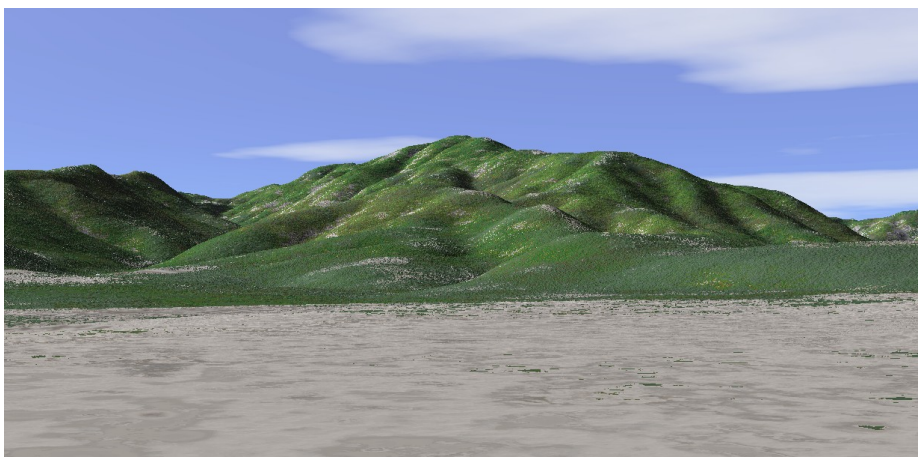


図-39 母ヶ岳までの眺望のシミュレーション

たがって庭園全体の観賞方向はおおむね北東に面しており、すなわち母ヶ岳の方向である。このために東側の刈込が特別に北側より低く設置されているとみられる。また、可視性及びシミュレーション分析からわかるように、ただ地形要素のみを考慮した場合、庭園所在地では四つすべての方向に山が見える（図-36）（図-37）。特に北方には山の景色がはっきり見え、仰角は約 8.1 度であり、母ヶ岳を眺望する 8.13 度の仰角と非常に近い（図-38）。しかし可視性分析から、眺望対象としての母ヶ岳は庭園周辺地域の最高峰であり、圧倒的な象徴性を持っていることが分かった（図-39）。

#### 4. 京都における臨済庭園からみた借景の遍在性

前述の分析により明らかとされたように、借景庭園における典型は主に臨済宗寺院の庭園である。ここからは京都地域において現存する臨済宗寺院の庭園について分析していきたい。

『日本庭園史大系』などを参考に、京都地域の臨済宗寺院の庭園を整理すると、計 32 か所の庭園の実例を得ることができた<sup>8</sup>（表-3）。そのうち 8 か所は大徳寺境内の塔頭庭園（方丈庭園を含む）、8 か所は妙心寺境内の塔頭庭園、3 か所は南禅寺境内の塔頭庭園であり、ほかには天竜寺方丈庭園、残りの 7 か所は臨済各派の独立寺院の庭園である。32 か所の庭園中大部分は中世後期から近世初期に作られており、よってここでは主に当時の歴史環境条件下において、これらの庭園及び庭園らが代表する臨済宗庭園に共通する借景の特徴の存在の可能性と構成に関して議論していきたい。そのうち正伝寺庭園、天竜寺方丈庭園、南禅寺本坊方丈庭園など 7 庭園を本研究では借景庭園として扱い、これらの借景方式と構成を参考基準とする。

32 庭園の立地は山腹、山麓、平地の三種類に分けられる。山腹に属するのは正伝寺庭園、円通寺庭園、高台寺庭園などであり、山麓は南禅寺を含む各塔頭庭園である。天竜寺方丈庭園、霊鑑寺庭園、林丘寺庭園などは平地に属する。しかしながら、京都の三方向を山に包囲されている地形的特徴から、平地に位置する庭園においても、山からの距離が遠いとはいえない。また、歴史的な理由より、臨済宗を主体として禅宗寺院は多く中世及び近世時代の京都市区範囲外の郊野に分布していたため、ほかの宗派と比較すると、比較的周辺の山系と隣接している。そのうち大徳寺、妙心寺が山系と

8 ここでいう京都地域というのは主に京都市を指しており、したがって酬恩庵の庭園は今しばらく分析しない。同時に収集した 32 か所の庭園は江戸時代及びそれ以前のものであり、『日本庭園史大系』では近代に設計建造された東福寺方丈庭園等 5 か所の庭園を収録しているが、これらについても研究の対象としない。また、分析の主な対象は枯山水庭園と比較的小型の池泉庭園であるため、大規模な池泉庭園、例えば鹿苑寺庭園慈照寺庭園等は分析の対象範囲ではない。

表一 3 京都における臨濟宗庭園に関する分析

庭園	時代	所属	立地	様式	観賞方向	見切	境界と	借景に	方丈書	設定さ	眺望対	距離	仰角		
竜源院庭園	室町	大徳寺	平地	枯山水	南	堀			南						
大仙院庭園	室町			枯山水	北, 東	堀	内		南						
真珠庵庭園	室町			枯山水	南, 東	堀	内	借景	南	東	比叡山	7.67	5.12		
聚光院庭園	桃山			枯山水	南	刈込	外		南						
孤篷庵庭園	江戸初期			枯山水	南, 西	刈込	外	借景	南	西	大文字	0.97	9.44		
大徳寺本坊	江戸初期			枯山水	南, 東	堀	内	借景	南						
芳春院庭園	江戸中末期			池泉観賞	北, 西	堀	内		西	北	城山	4.27	5.06		
竜光院庭園	江戸中末期			枯山水	南	堀	内		南	南	船岡山	0.37	4.54		
退蔵院庭園	室町			枯山水	南, 西	樹木			南	南		極遠	極小		
靈雲院庭園	室町			枯山水	南, 西	堀			南	西	雙ヶ岡	0.51	5.8		
玉鳳院庭園	桃山	枯山水	西	堀			南								
雑華院庭園	江戸初期	妙心寺	平地	枯山水	南	堀			南						
妙心寺小方	江戸中末期			枯山水	南	堀			南						
桂春院庭園	江戸中末期			枯山水,	南, 東	刈込	外		南	東	比叡山	10.92	3.76		
東海庵庭園	江戸中末期			枯山水	西	堀			南						
春光院庭園	江戸中末期			枯山水	南, 西	堀			南						
										北(天)	衣笠山	1.12	7		
芬陀院庭園	室町			東福寺	平地	枯山水	南	樹木	内		南	南東	稲荷山	1.48	6.29
普門院庭園	江戸初期					池泉観賞	東	築山			東	南東			
												西(方)	ボンボ	14.49	2.43
											北(方)	愛宕山	15.76	3.11	
両足院方丈	桃山	建仁寺	平地	枯山水	南, 東	堀			南	東	清水山	1.43	7.96		
両足院書院	江戸中末期			池泉観賞	北, 東	築山			東						
靈洞院庭園	江戸中末期			池泉観賞	南, 東	堀	内		南	南		極遠	極小		
									西(境)	愛宕山	14.35	3.47			
金地院庭園	江戸初期	南禅寺	山麓	枯山水	南, 東	樹木			南	南	東山	0.94	9.26		
南禅寺本坊	江戸初期			枯山水	南	堀		借景	南	南東	東山	0.24	18.82		
南禅院庭園	鎌倉			池泉観賞	南, 西	築山			西	西			妨げ		
									西(境)	愛宕山	15.45	3.14			
天竜寺方丈	鎌倉	天竜寺	山麓	池泉観	西	樹木		借景	西		嵐山	0.91	21.12		
円徳院庭園	桃山	建仁寺派	平地	枯山水	北, 東	築山			東	東	東山	0.64	13.04		
高台寺庭園	江戸初期		山腹	池泉観	南, 東	樹木			南	東	東山	0.57	13.44		
靈鑑寺庭園	江戸初期		山麓	池泉観	南, 東	築山			南	南東	山	0.3	19.41		
正伝寺庭園	江戸初期	妙心寺派	山腹	枯山水	東	堀	内	借景	東		比叡山	8.37	4.68		
竜安寺庭園	室町		山麓	枯山水	南	堀			南	南	男山	17.24	0.02		
円通寺庭園	江戸初期		山腹	枯山水	東	刈込	外	借景	東		比叡山	5.44	7.45		
林丘寺庭園	江戸初期		天竜寺派	山麓	池泉観賞	北, 東	築山			北	東	山	0.48	19.23	

一番遠いが、それでも 1 キロ範囲内である。天文年間（1532-1555）以降の京都市街と寺院分布からわかるように、多くの禅宗寺院は市街地範囲にはなく、妙心寺、天竜寺などの位置は完全な郊外である（図-40）。よって当時庭園と周辺山脈との視線の関係は周辺の村の建築などによる阻害を受けている可能性は小さかったといえる。



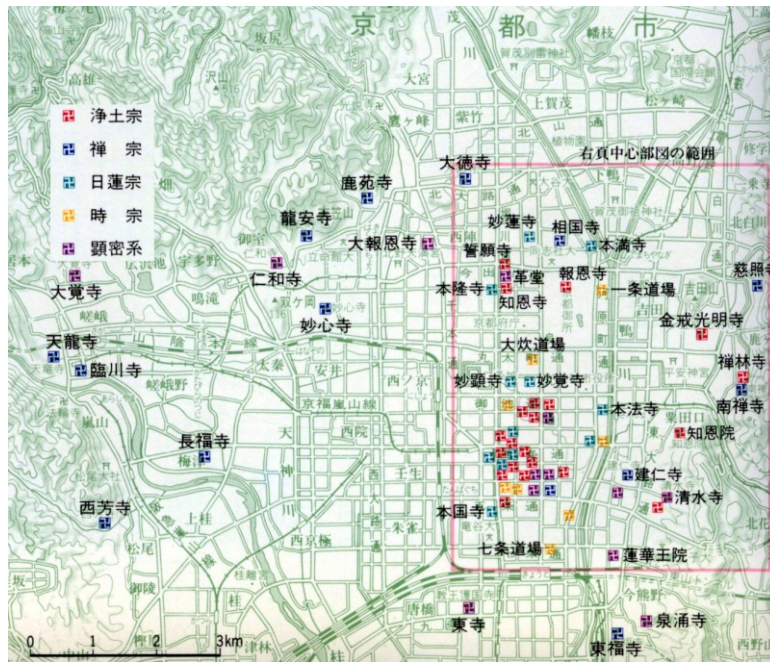


図-40 天文年間以降京都における寺院の分布（足利健亮『京都歴史アトラス』より）



図-41 歴史に関する地図にみる大徳寺の所在地区の状態及び変遷（一段目左から順に、桃山時代、延宝元禄期間、天明文化期間、大正四年、京都市史編纂所『京都の歴史』より）

大徳寺境内の各庭園を例に分析を行った。中世及び近世の京都都市地図をみると、桃山時代大徳寺周辺は北側の神社以外ほぼ空白の状態である（図-41）。延宝（1673-1681）元禄（1688-1703）期間，北側に紫野村などが現れ，南東側は町地として開発されていった。天明（1781-1788）文化（1804-1817）期間では，周辺開発が一層盛んとなり，東，北，西三方向に町地が出来ている。一方で本坊方丈，真珠庵の東側

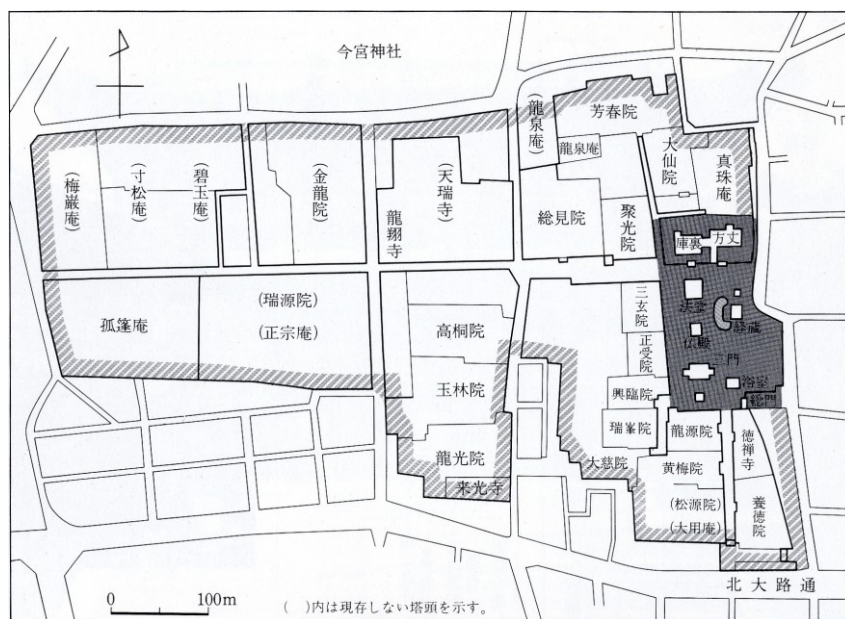


図-42 大徳寺境内図（山根有三『大徳寺』より）

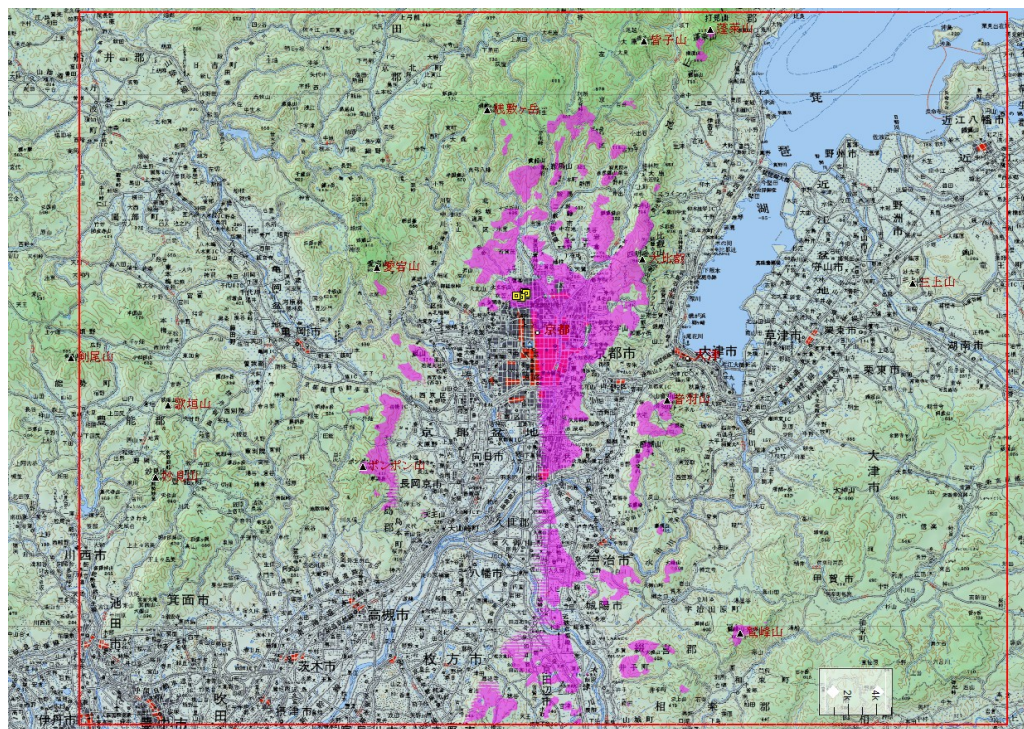
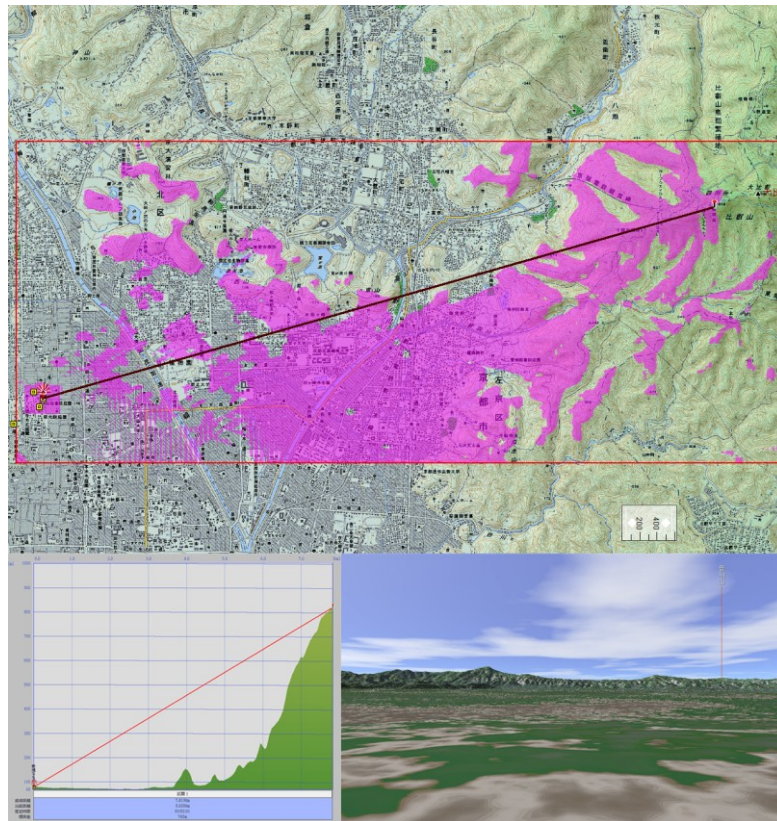


図-43 大徳寺に関する可視分析

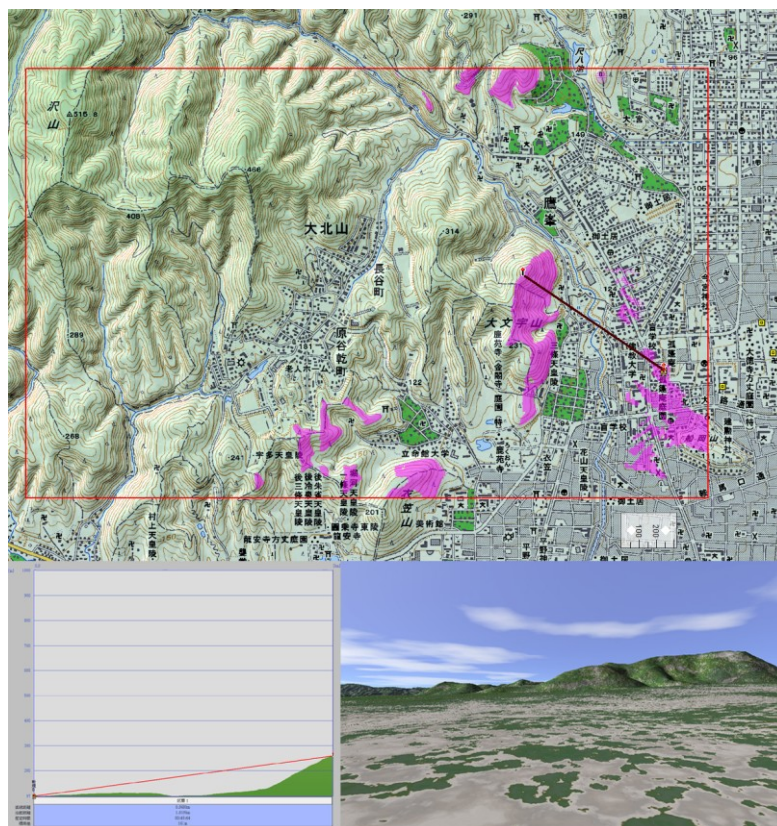
は引き続き空白地域であることに注意したい。この状態は少なくとも明治期まで継続し、大正四年（1915）の地図で初めてこの地域に立地利用がなされていることが反映している。よって、江戸初期以前では、大徳寺境内の各庭園の東向き、西向き、南向きの眺望は都市建設による阻害を受けていないといえる。これを前提に、三次元のシミュレーションを行った。まず大徳寺境内の中心位置を基準点として大範囲にわたる可視範囲をシミュレーションして、各方向の眺望可能な対象を明確にした（図-42）（図-43）。次にそのうちの真珠庵庭園（図-44）、孤篷庵庭園（図-45）、竜光院庭園（図-46）、芳春院庭園（図-47）の東向き、西向き、南向き、北向きの眺望状況を逐次分析した。ここから以下の四つの眺望対象が得られた：比叡山、大文字山、船岡山、城山である。これらはいずれも各方向から眺望できる最大仰角を有する山である。結果として、一番小さい仰角でも約5度、真珠庵庭園から比叡山を眺望する仰角は5.12度あることが分かった。前述の分析より真珠庵庭園と大徳寺本坊方丈庭園の借景方式はほぼ一致し、『日本名園図譜』において描写された当時の状況から判断して比較的低い刈込を境界とし、仰角約5度でも相当顕著な借景場面が得られることが分かった（図-48）。現存の各庭園の境界は主に壁であり、聚光院庭園など二つの庭園のみ刈込を境界としていて、そのうえ比較的高い。そのうち7個の庭園中の壁の内側に長い線形の刈込が植えてあることに注意されたい（図-49）。十分な歴史的根拠には乏しいが、歴史上江戸末期以前では主に刈込を境界としていた可能性を否定できない。『都林泉名勝図会』で描かれている江戸中期の真珠庵庭園寸松庵庭園など庭園の図面において、低いまがきを境界としている状況も見受けられる（図-50）。加えて、壁を境界としている場合でも、8ヶ所の庭園の多くは小スケールの枯山水庭園であり、類似する正伝寺庭園を参照とすると、正伝寺庭園から比叡山を眺望する仰角は4.68度であり、したがって壁を境界とする条件においては、5度くらいの仰角でも十分顕著な借景ができることが分かった（図-51）。よって以下のように推論したい：少なくとも江戸初期以前に、大徳寺境内塔頭庭園、特に境地周辺においては、どこにおいても借景が存在していた可能性が高い。

前述の分析方法を同様に立地が平地の庭園に当てはめてみると、以下のような推論が得られる：妙心寺の塔頭庭園、東福寺の塔頭庭園、建仁寺の塔頭庭園、円徳院庭園はそれぞれ西向き及び北向き、南向き、東向き、東向きからの山の借景を有する可能性が非常に高い。

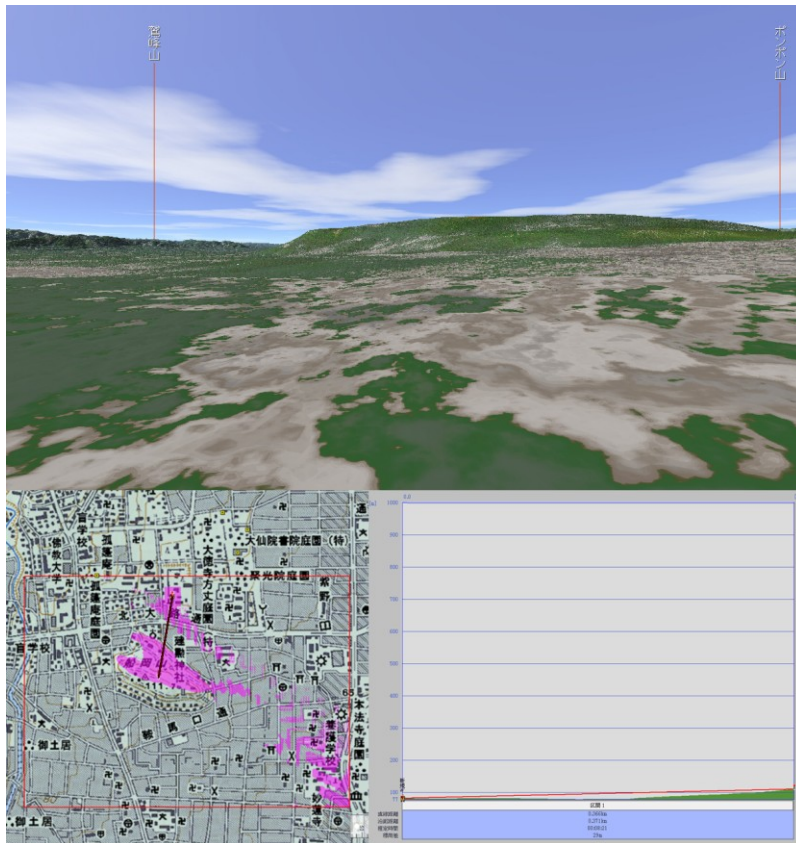
次に山麓に位置する庭園を考察してみたい。竜安寺庭園のような山麓に位置するが、接近する山に面していない状況を除くと、庭園の眺望仰角は非常に大きい。しかもそのうち多くの例としての借景が今日まで保存されている。重要な理由として考えられ



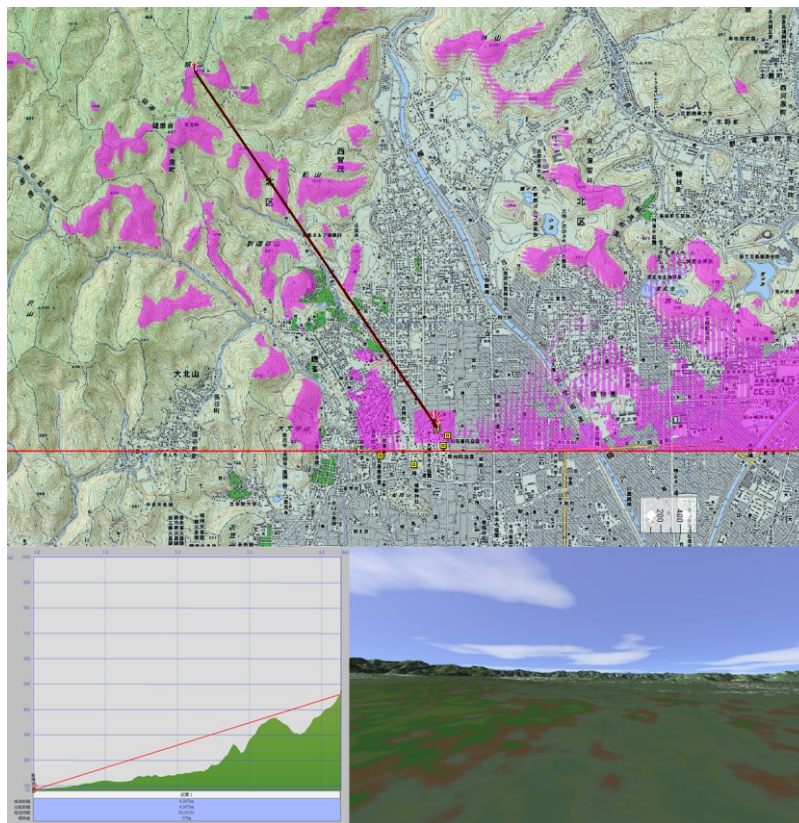
図一 4 4 真珠庵庭園に関する可視と断面分析及び眺望のシミュレーション



図一 4 5 孤篷庵庭園に関する可視と断面分析及び眺望のシミュレーション



図一 4 6 竜光院庭園に関する可視と断面分析及び眺望のシミュレーション



図一 4 7 芳春院庭園に関する可視と断面分析及び眺望のシミュレーション



図-48 大徳寺本坊方丈庭園の借景（本多錦吉郎『日本名園図譜』より）

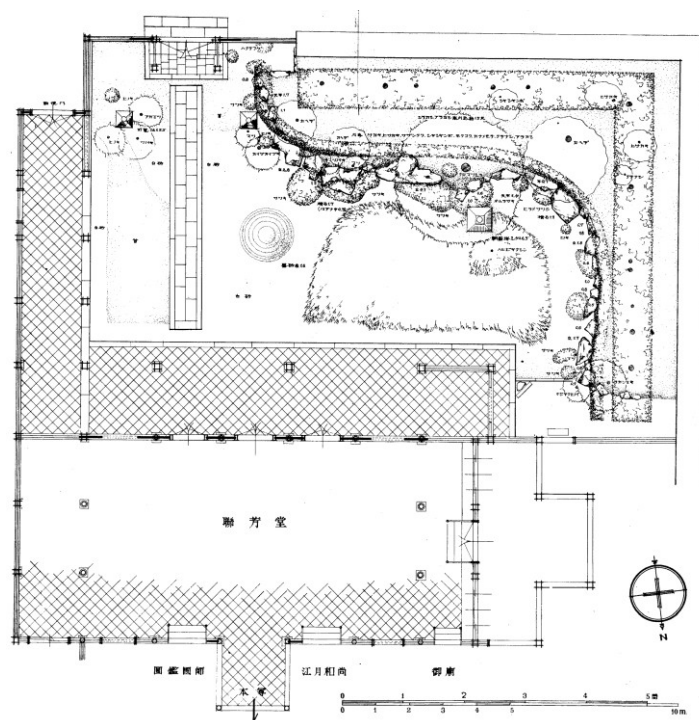


図-49 竜光院庭園平面図（重森三玲『日本庭園史大系』より）



図-50 碧玉庵庭園（秋里籬島『都林泉名勝図会』より）



図-5.1 正伝寺の借景

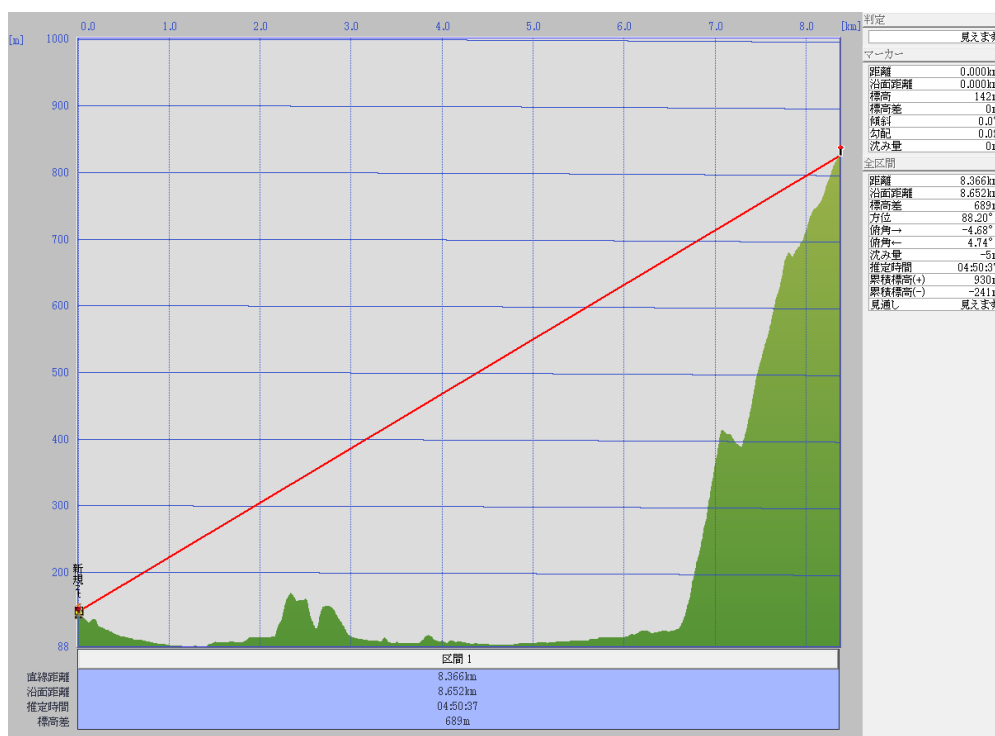


図-5.2 正伝寺の借景に関する断面分析

るのは眺望対象が近く、仰角が大きく、周辺環境変化の干渉を受けづらいからである。また、山腹に位置する3庭園を見ると、その借景は今でも破壊されておらず、正伝寺庭園円通寺庭園が現存借景の典型となったように、その理由は庭園と眺望対象の間に

における理想的なコンケープの地形が存在するため、借景が周辺環境変化及び都市化の進展過程に影響されにくいからである（図-52）。

以上を通して、京都に位置する臨濟宗寺院の庭園ではその独特の立地環境と庭園要素の形式により、少なくとも江戸初期以前より借景が遍在的に存在していたこと、またその時期より現在まで、異なる立地条件庭園の借景は異なる変遷をたどっており、そのうちコンケープ地形は借景にとって存続の重要な要件であることが明らかになった。

## 5. 本章のまとめ

本章では三つの観点から：日本の借景庭園の代表としての31ヶ所の庭園、12ヶ所の背山配置の庭園、及び京都地域の32ヶ所の臨濟宗庭園を取り上げ分析し、詳細に各庭園の借景の視覚上の要素及び構成関係を統計した。

31ヶ所の借景庭園の分析から、庭園の方向性及び「大小性指数」との間に強い関連性が存在することを見出した。すなわち借景庭園の眺望の「大小性指数」が大きくなるにつれ、その方向性も強くなることである。よって庭園設計においては借景に対する意識と眺望対象のスケールが強く考慮されたと考えられ、眺望対象のスケールが大きいほど、借景に対する能動的意識を強く怠りて庭園が設計されたと考えることもできる。さらに、借景庭園は潜在的「大小性指数」の値が大きい環境条件下で配置され、「小中見大」の意匠、すなわち小さい庭園空間を通してより大きい借景空間を覗き見ることによってなされる大と小の対比が、借景及び借景庭園が内包する本質的な設計理念を考察することができる。

同時に、「小中見大」と方向性の関係にみられる借景意識を、10ヶ所の背山借景庭園の分析においてさらに確認することができた。これらの庭園は山に直面する配置という伝統的慣習に反し、借景対象の多くが共通の特徴を有する：眺望対象としての山は周辺地域が庭園可視範囲内における顕著なランドマークである。この特徴はほかの方向性が比較的強い借景庭園においても見受けられる。これは「小中見大」の意匠の「大」と対応している。他方、この特徴及び反映される強烈な借景意識によって、これらの庭園の方向乃至は配置全体が借景対象によって確定された可能性が非常に高いと推測できる。

さらに、32ヶ所の臨濟宗庭園の分析から、京都に位置する臨濟宗寺院の庭園では独特の立地環境と庭園要素の形式に対応する形で、少なくとも江戸初期以前、借景が遍



在的に存在していたことが分かった。同時に借景庭園と借景対象の間のコンケープ型の地形が、借景庭園の存続に関わる重要な条件であることが分かった。

## 第六章 比較と結論

## 1. まとめ

本研究の各章を通して得られた成果を下記にまとめる。

第一章では中国と日本における借景に関する既往研究を整理して、研究課題を明確にし、研究の目的及び方法について述べた。

第二章では中国造園における借景の概念及びその変遷を考証し、その上借景を成り立たせる構造を分析した。その結果以下のことを明らかとした。

宋時代の黄庭堅の「借景亭」が借景という用語の濫觴であり、その後の借景という用語の変遷に多大な影響を与えた。その後清時代の李漁の「尺幅窓」は借景の流れと造園史において重要である。これら「借景亭型」と「尺幅窓型」の構造は小規模な技法であり、園内から園外までの眺望とは異なるといえる。それに対して明時代に著された『園冶』の借景の概念は例外である。ただし『園冶』は最初に「借景」を系統的に解説したにもかかわらず、古典の「借景」に与えた影響は弱いと考えられる。古典の「借景」、特に「尺幅窓型」の構造において、視覚体験に関して無意識から意識へ、客体への意識から媒介と主体への意識へという展開が認められる。近代以降の借景という用語は、『園冶』の借景を基礎とするという理解が陳從周などの研究には支配的であった。借景の構成は古典の「借景亭型」と「尺幅窓型」から大規模な「遠眺型」に変わってきた。近代の研究において、借景という用語は単純な眺望に近づく傾向がみられる。

第三章では日本の造園における借景の概念のはじまりを考証し、その展開について特に近代以降の造園研究における概念の変遷を整理し、さらに典型とされる借景庭園の事例を収集し、空間構造特徴を分析した。その結果以下のことを明らかとした。

「借景」は最初に『園冶』ではなく黄庭堅の詩集によって中国から伝来した。万里集九の『帳中香』は日本における「借景」の濫觴である可能性が高い。しかし、造園の領域における「借景」の誕生は明治期である。明治期に、「借景」が次第に論じられるようになり、小沢の「園苑源流考」によって「借景」は日本の庭園及び造園研究に結びつけられた。この時期の借景の概念は『園冶』に解説された概念に近く、遠距離の眺望に当たるといえることができる。明治期に「借景」はこの時期の『園冶』の普及によって展開したと推測される。その背景には明治期からの近代美術と庭園研究と造園学の萌芽はいうまでもなく、明治期における近代公共図書館の発展と古籍のパブ

リック化ということも見逃せない要因として挙げられる。このように明治期以降の造園研究における「借景」は『園冶』から取り入れられたと考えられる。近代以降、「借景」に関する定義や議論が多く重ねられてきた。借景の概念は明治期の眺望に当たる借景の概念と比べると、次第に狭く、厳しく、複雑に定義されてきたことがわかった。このプロセスは「借景」を造園学の高度な専門用語として確立することであった。この系統化と専門化の確立過程において、極端化の傾向がみられる。その結果借景の概念は『園冶』における借景の概念から離れてきた。これまでに様々な概念が現れたが、「借景」の定義はまだ十分に成立していないのが現状といえる。数多の既往研究で借景に結び付けられた庭園は非常に多く、性格も様々である。その中で、代表的とされる庭園、たとえば大徳寺本坊方丈庭園などは「小中見大」という空間意匠として整理することができた。このような庭園の例は「借景」の様々な定義との間にいくつかの関連性がみられ、『園冶』の借景の意匠とも中国の庭園意匠とも異なっている。このように、日本の造園における借景の概念は『園冶』から離れ、日本庭園独自の意匠として展開してきたと考えられる。

第四章では中国庭園における眺望の一般モデルをまとめた上で、蘇州地域における庭園を考証・調査し、特に拙政園を典型例としてその水景と境界の変遷を考証し、眺望との関連を分析し、さらに眺望対象ごとに塔を眺望対象とする庭園と山を眺望対象とする庭園を考証・調査し、それらに関連する造園理念を以下のように明らかにした。

庭園における眺望に関する一般モデルは「登高眺遠」、即ち庭園内の楼閣或は築山などの高所から園外に位置する山などの風景を眺めることである。この一般モデルでは、視対象までの遠距離と視野の広さが重要視されている。さらに、庭園の配置において眺望の視点場とする高所が景観シークエンスの終端部に設定されることも造園における理想的なモデルということができる。借景の典型である拙政園の眺望に関する分析から、時代とともに庭園の配置が変化し、眺望に関する意識も変化したことを明らかとした。明代から清代末期までに蘇州古城において、塔は通常見ることのできた風景であったのに対して、郊外の山の風景は通常眺望できなかつたと推定される。創立期における拙政園から北寺塔は眺望できたが、水景が現在の状態とは異なっていた。現在の借景における優れた視覚構成は清代中期から形成され、清代後期に完成したものと推測される。さらに、創立期の拙政園は境界性が弱く、庭園は周辺の田野に溶け合うように存在していたと推測される。その結果、塔の眺望は古城における日常的風景であり、塔よりも山が造園上は意識されていた可能性が高かつたといえる。続いて塔影に関する調査における10ヶ所の庭園の分析からは、「隔」という概念が重要なものとして考察された。すなわち古城における一般的な塔の眺望に対して、空間

的な境界に隔てられた庭園からの塔の眺望が造園では意識されていた可能性が高いことが推測された。さらに、10 庭園ほとんどが小庭園であり、囲み性が強いことも明らかとなった。塔影に関する分析の結果、境界性及び境界性がもたらす囲み性と眺望の関連は拙政園における眺望の特性とも合致した。一方で見山庭園の分布の分析に基づいて、庭園の立地は山の眺望よりも山に近いことが重要視され、「山林第一」であったことが推察された。さらに見山庭園において、山から遠ざかる庭園では眺望視点場の配置は理想的なモデルに合致し、高所が景観のシークエンスの終端部に設置されている。それに対して、山に近い庭園における景観のシークエンスには理想的なモデルとの間に齟齬があった。なお眺望において高い視点と比べると低い視点の事例は非常に少なく、収集された例はすべて山に近い庭園であった。低い視点の場合、視点場は堂という建築であることが多く、山の眺望は主景ではなかったことが推定された。

眺望に関する理想的なモデルでは、眺望の視点は庭園の高所であり、高所は遊覧経路の終端部に設置され、さらに遊覧経路に沿って景観シークエンスが小から大まで、低から高まで、近から遠までのように変化をもって意匠されていることがわかった。また、「遠」という意匠、即ち距離が遠く範囲が広い眺望対象が理想的なモデルには期待されていることが考察された。これらのことから、理想的な眺望対象は庭園からある境界によって隔てられ、眺望の高所に限り眺められるものとして考えられてきたことが整理された。言い換えれば、理想的なモデルは「登高眺遠」の際に、空間と視野の激的変化が意匠されているものといえる。理想的なモデルとともに、造園における実用あるいは現実的な要素が混在していることがうかがえる。

第五章では日本庭園における借景庭園の事例を収集した上、景観工学の手法などに基づいて設定された指標で 31 ヶ所の借景庭園を分析し、その中の山に背向するように設置されている庭園を 10 ヶ所考察し、さらに京都地域における主要な臨濟宗寺院の庭園に関する分析を行い、江戸初期における借景の可能性と様子を推論した。その結果以下のことを明らかとした。

31 ヶ所の借景庭園の分析から、庭園の方向性と「大小性指数」との間に関連性が存在することを見出した。すなわち借景庭園の眺望の「大小性指数」が大きくなるにつれ、その方向性も強くなることである。よって庭園設計においては眺望対象のスケールと借景意識の間に強い関連性が存在し、眺望対象のスケールが大きいくほど、借景に対する意識がより強いということが出来る。三章でみた「小中見大」の意匠、すなわち小さい庭園空間を通してより大きい借景空間を覗き見ることによってなされる大と小の対比は、借景及び借景庭園が内包する特質と理想形式である。同時にこのような借景への意識は、10 ヶ所の背山型の借景庭園の分析においても確認された。これら

の庭園は山に對面する配置をするという伝統的形式に当てはまらない。そして借景対象の多くが眺望対象としての山が庭園からの可視範囲内における顕著なランドマークであるという共通性をもつ。この特徴及びそれに反映される借景意識によって、これらの庭園の方向乃至は配置全体が借景対象によって確定された可能性が非常に高いと推測できよう。さらに、独特の立地環境と庭園要素の形式から、少なくとも江戸初期以前、京都に位置する臨濟宗寺院の庭園では借景が遍在的に成立していたことが分かった。同時に、いくつかの分析によって、借景庭園と借景対象の間のコンケープの地形は、庭園の借景を維持する上で、重要な条件であることが分かった。

## 2. 比較

### 2-1. 展開の経緯について

中国と日本造園では借景の用語と概念が同じ典籍から生まれたことがうかがえる。具体的には、黄庭堅の「借景亭」という漢詩が最初に借景を指摘した。黄庭堅に指摘された借景の用語は日本へ伝来し、万里集九に受け継がれた。一方、中国と日本の両方の近代造園研究では『園冶』における借景の概念が用いられている。『園冶』は中国の明代後期に上梓され、清代に日本へ導入された。同時に、中国においては絶版になり、近代の中国学者によって日本から中国へ逆輸入された。しかし、中国と比べると、日本では借景が古典籍において流布したことが非常に少ない。本格的な導入は近代造園研究の先行者によって完成された。

中国と日本の両方の造園学とも近代初頭に借景が『園冶』から導入された。借景に関する解釈は概ね同じであり、「遠眺望型」として理解された。以降、両方の間の差異は次第に大きくなった。中国では、借景の意味する範囲が次第に広げられ、借景として指摘されている庭園が多くなってきた。日本では、逆に狭くなり、「本格的借景」あるいは「本格的借景庭園」という言い方がよくみられるようになった。

これに関して、以下の要因が考えられる。中国では、現存する庭園の実例は少なく、主に『園冶』を基準として借景を把握している。『園冶』における論述と解釈は厳密な定義あるいは推論ではなく、文学的な叙述に基づいて行われている。それに対して、日本では、庭園の実例が多く、借景の概念は次第に『園冶』から離れ、庭園の構成によって規定されるようになった。また、中国では、借景に関する議論と研究は非常に少なく、また内容の重複も少なくない。一方日本では、関連する研究は極めて多い。

この中で、研究者が研究自体の独自性の確保のため、以前の研究成果と異なる知見を作り出す傾向がみられる。その結果、借景に関する概念は差別化と狭義化を進めるようになっていたことが考えられる。

一般に、日本庭園は中国庭園から多大な影響を受けてきたと認識されている。しかし、中国庭園の影響はあるものの、借景の差異をみると日本庭園自体も高度な完結性と独自性を持っていることが判る。中国と日本の現存庭園にみられる大きな差異もこの独自性の蓄積の表れといえる。

## 2-2. 造園理念について

借景の構成に関しては、中国では「登高眺遠」というモデルをベースとして、借景に関する造園理念としては「小後見大」という理念の存在が提案できる。一方で日本では、低い視点からのかつ定点からの眺望というモデルであり、「小中見大」という造園理念がみられる。

両国における借景に関する造園理念には、「大」と「小」の比、「小」を通過して「大」を見るということは共通している特徴である。さらに、中国では、庭園における遊覧経路に沿う空間分節、スケールが大きい空間と小さい空間の組み合わせから生じる空間のリアリズム、視線の止揚などの意匠に「大」と「小」の比の理念が明らかにみられる。日本の借景庭園にも一部にこのような理念はみられ、特に慈光院庭園には現存する蘇州庭園のような景観シークエンスの配置がなされている。

眺望対象に関しては、中国では「遠」のもの、境界に隔てられているもの、高所に限られて見えるものなどが理想的であり、日本では尺度が巨大な山が理想的である。

しかし、眺望に関する意識に差異がみられる。日本では現存する典型的な借景庭園は特定の借景対象に基づいて庭園の方向と配置を定めた可能性が非常に高く、借景は庭園風景の不可欠な要素になっている。中国では外景が眺望できる庭園においても庭園と外景の関連性は強くなく、庭園自体の完結性が高い。多くの庭園では、造園設計時に外景を意識しなかった可能性が高い。例えば、いくつかの庭園は、塔までの眺望が命名されているが、園記の記述をみれば庭園が完成した後に、塔の眺望の風景が意識されていたことがうかがえる。また、園記における眺望に関する様々な記述から、眺望対象として、一つの特定の山ではなく山並みが注目されていることがわかった。

また、境界に関しては、日本では現存する多くの借景庭園に刈込がみられる。一方中国では、現存する庭園には主に塀が設置されているが、庭園の境界に関しては歴史的には様々な形態の可能性がある。塀以外にも、まがきなどに囲まれたケース、ある

いは囲まれていなかったケースなどの諸形態がある。刈込の記述もあるがこれを庭園の境界とする事例は見付けられなかった。

さらに、理想的な構成及び理念として、名称が示すように「小後見大」と「小中見大」の間には差異がうかがえる。前者は景観シークエンスの展開とともに小を経て大までの接続であり、後者は観賞のレンズとして小を通して大を見ることを指している。何故ならば、明代後期以降の蘇州庭園の多くは、スケールが大きいがないが、数多の建築物が観賞の場所として設置され、日本庭園における回遊式に当たるといえることができる。したがって、第五章における方向性に関する分析方法に基づいて、中国庭園は方向性が弱く、借景の意識が強くなく、眺望は景観シークエンスの一節にすぎないと判断できる。日本江戸期の大名庭園と比べると、スケールと手法が異なるが、似ている特徴を持っている。例えば小石川後樂園のような庭園では、高い築山が配置され、遠眺の視点場になっている。

日本では借景庭園というほどに借景を中心的主題とする庭園の類型が生まれたことに対して、中国では借景は庭園における景観構成の一節にすぎない。この背景となる要因として、異なる立地環境による山と庭園の関係があると考えられる。日本では、京都などの地域で、多くの山に囲まれている環境が形成されている。中国では、蘇州などの地域は、ほとんどが平地であり、山ではなくいくつかの丘陵が分布している。日本庭園の場合では、庭園と周囲の自然との繋がりが比較的強いといえる。このような異なる自然環境から生まれた庭園の特質さらに自然観にも差異がみられ、借景はその中の一例であるといえることができる。

### 3. 結論

設定された四つの目的に対して、以下の四つが研究から得られた結論の概要である。

- ①借景の展開に関しては、中国と日本造園では借景の用語と概念が同じ典籍から生まれたことがうかがえる。具体的には、黄庭堅の「借景亭」という漢詩が最初に借景を指摘した。黄庭堅に指摘された借景という用語は日本へ伝来し、万里集九に受け継がれた。その後、中国と日本の両方の造園学とも近代初頭に借景が『園冶』から導入された。借景に関する解釈は概ね同じであり、眺望のように理解されていた。近代以降、両方の間の差異は次第に大きくなった。
- ②借景の構成に関しては、中国では「登高眺遠」というモデルがあり、それに反映された借景に関する造園理念として「小後見大」という理念が提案できる。一方

で日本では、定点でかつ低い視点からの眺望というモデルであり、「小中見大」という造園理念がみられる。

③借景の一般理念に関しては、両国ともに「大」と「小」の比、「小」を通過して「大」を見るということが共通の特徴である。眺望対象に関しては、中国では「遠」のもの、境界に隔てられているもの、高所に限って見えるものなどが理想的であり、日本では尺度が巨大なものが理想的である。

④両国の間における顕著な差異として、日本では借景を主題とする借景庭園という「式」が生まれたのに対して、中国では借景は庭園における景観構成の一部にすぎないといえることができる。



## 参考文献

### 古漢文類

- 陶潛（晋代）：陶淵明集，陶淵明文集卷六：宋刻遞修本
- 葛洪（晋代）：西京雜記，卷二：四部叢刊景明嘉靖本
- 沈約（南北朝）：宋書，卷六十七列傳第二十七：清乾隆武英殿刻本
- 劉義慶（南北朝）：世說新語，世說新語卷之下：四部叢刊景明袁氏嘉趣堂本
- 謝朓（南北朝）：謝宣城詩集，卷三五言詩：明末毛氏汲古閣景寫宋刻本
- 謝靈運（南北朝）：謝康樂集，卷一賦：明萬歷沈啓原刻本
- 白居易（唐代）：白氏長慶集，白氏文集卷第十一：四部叢刊景日本翻宋大字本
- 宋之問（唐代）：宋之問集，卷上：四部叢刊續編景明本
- 歐陽詢（唐代）：藝文類聚，卷三十八禮部上：清文淵閣四庫全書本
- 毛居正（宋代）：增修互注禮部韻略，卷四：清文淵閣四庫全書本
- 王象之（宋代）：輿地紀勝，卷第二十四：清影宋鈔本
- 司馬光（宋代）：溫國文正公文集，溫國文正公文集卷第六十六：四部叢刊景宋紹興本
- 汪元量（宋代）著，孔凡禮（1984）輯校：增訂湖山類稿：中華書局
- 呂祖謙（宋代）：宋文鑒，皇朝文鑑卷之二十五：四部叢刊景宋刊本
- 李格非（宋代）：洛陽名園記：明古今逸史本
- 陳元靚（宋代）：歲時廣記：清十萬卷樓叢書本
- 華岳（宋代）：翠微南征錄，卷九：四部叢刊三編景舊鈔本
- 郭思（宋代）：林泉高致集，山水訓：明刻百川學海本
- 陳造（宋代）：江湖長翁集，卷十四：明萬歷刻本
- 凌萬頃（宋代）：（淳祐）玉峰志，卷上：清黃氏士禮居鈔本
- 黃子耕（宋代）：山谷年譜，卷二十七：清文淵閣四庫全書本
- 黃庭堅（宋代）：豫章黃先生文集，第六：四部叢刊景宋乾道刊本
- 黃庭堅（宋代）著，任淵（宋代）註：山谷內集詩註，內集卷十三：清文淵閣四庫全書本
- 釋寶曇（宋代）：橘洲文集，卷十記序銘：日本元祿十一年織田重兵衛刻本
- 陰時夫（元代）：韻府群玉：清文淵閣四庫全書本
- 黃庚（元代）：月屋漫稿：清文淵閣四庫全書本

楊諫（元代）：（至正）崑山郡志，卷一：元至正元年修清宣統元年本  
万里集九（室町）：帳中香，第十三之下：慶長·元和年間刊本  
万里集九（室町）：梅花無尽藏：玉竹村二（1972）編：五山文学新集第6卷：東京大學出版會  
琴叔景趣（室町）：松蔭吟稿：塙保己一（江戸）編：続群書類從，第13輯：經濟雜誌社  
王世貞（明代）：弇州山人四部續稿：清文淵閣四庫全書本  
文洪（明代）：文氏五家集，卷十三錄事詩集：清文淵閣四庫全書本  
王冕（明代）：竹齋集，卷中五言律：清文淵閣四庫全書本  
王穉登（明代）：紫芝園：徐樹丕（明代）：識小錄，識小錄卷之四：涵芬樓秘笈景稿本  
王鏊（明代）：震澤集，卷十七記：清文淵閣四庫全書本  
王鏊（明代）：（正德）姑蘇志：清文淵閣四庫全書本  
王寵（明代）：雅宜山人集，卷八：明嘉靖十六年刻本  
石瑤（明代）：熊峰集，卷九：清文淵閣四庫全書本  
李東陽（明代）：懷麓堂集，卷三十文稿十：清文淵閣四庫全書本  
李流芳（明代）：檀園集，卷八記疏：清文淵閣四庫全書本  
貝瓊（明代）：清江文集，清江貝先生文集卷之二：四部叢刊景清趙氏亦有生齋本  
吳桂森（明代）：息齋筆記，卷下：明崇禎刻本  
吳寬（明代）：家藏集，匏翁家藏集卷第二十八：四部叢刊景明正德本  
胡應麟（明代）：詩藪，外編：四明刻本  
陸明輔（明代）：藤谿記：孫柚（明代）編：籐溪詩：清鈔本  
笑笑生（明代）：金瓶梅，卷十一：明萬曆刻本  
徐惟起（明代）：鼇峰集，卷十五言律詩：明天啓五年南居益刻本  
徐渭（明代）：徐文長文集，卷五七言古詩：明刻本  
梅鼎祚（明代）：梁文紀，卷十一：清文淵閣四庫全書補配清文津閣四庫全書本  
張溥（明代）：漢魏六朝一百三家集，卷九十二王僧孺集：清文淵閣四庫全書本  
曹學佺（明代）：曹大理集，卷七芝社集：明萬曆刻本  
費宏（明代）：費文憲公摘稿，卷三：明嘉靖刻本  
楊慎（明代）：升菴集，卷三十五七言絕句：清文淵閣四庫全書補配清文津閣四庫全書本  
鄭文康（明代）：平橋稿，卷九序：清文淵閣四庫全書補配清文津閣四庫全書本

鄭元勳（明代）：媚幽閣文娛，卷七：明崇禎刻本

趙世顯（明代）：芝園稿，卷二十三七言律詩：明萬歷刻本

樊深（明代）：（嘉靖）河間府志，卷二十四人物志：明嘉靖刻本

錢穀（明代）：吳都文粹續集，卷四十八詩：清文淵閣四庫全書補配清文津閣四庫全書本

顧起元（明代）：遯園漫稿：己未明刻本

丁宿章（清代）：湖北詩徵傳略，卷二十八：清光緒七年孝感丁氏涇北草堂刻本

丁紹儀（清代）：國朝詞綜補，卷八：清光緒刻前五十八卷本

方文（清代）：蠡山集，再續集卷二：清康熙二十八年王槩刻本

尤侗（清代）：西堂雜俎，雜俎二集卷六：清康熙刻本

王昶（清代）：湖海詩傳，卷三十：清嘉慶刻本

王昶（清代）：（嘉慶）直隸太倉州志：清嘉慶七年刻本

王祖畬（清代）：（宣統）太倉州志：江蘇古籍出版社 1991 影印本

王特選（清代）：竹嘯餘音：清康熙刻本

王德溥（清代）編：養素園詩：丁丙（清代）輯：武林掌故叢編，第五帙：錢塘丁氏嘉惠堂本

王學浩（清代）：（道光）崑新兩縣志：江蘇古籍出版社 1991 年「中国地方志集成」影印本

方濬頤（清代）：二知軒詩鈔，卷五：清同治五年刻本

尹繼善（清代）：尹文端公詩集，卷七：清乾隆刻本

阮元（清代）：兩浙輜軒錄，卷二十九：清嘉慶刻本

先著（清代）：之溪老生集，卷七藥裏續集上：清刻本

先著（清代）：勸影堂詞，卷中：清刻本

沈大成（清代）：學福齋集，詩集卷十四百一詩鈔：清乾隆三十九年刻本

佚名（清代）：陽秋剩筆：巴蜀書社（1988）編：清代野史，第七輯：巴蜀書社

李清馥（清代）：閩中理學淵源考，卷四十七：清文淵閣四庫全書本

汪堃·朱成熙（清代）：（光緒）崑新兩縣續修合志：江蘇古籍出版社 1991 年「中国地方志集成」影印本

汪森（清代）：粵西詩文載，詩載卷十六：清文淵閣四庫全書本

何焯（清代）：義門先生集，卷二記傳雜文，潭上書屋記：清道光三十年姑蘇刻本

沈復（清代）著，羅宗陽（1981）校點：浮生六記：江西人民出版社

李漁（清代）：閑情偶寄，卷八居室部：清康熙刻本

李漁（清代）著，江巨榮ら（2000）註：閑情偶寄：上海古籍出版社

沈德潛（清代）：清詩別裁集，卷二十二：清乾隆二十五年教忠堂刻本

范光文（清代）：閩行隨筆：民國適園叢書本

金武祥（清代）：粟香隨筆，粟香二筆卷二：清光緒刻本

金農（清代）：冬心先生續集，詩：清平江貝氏千墨庵鈔本

吳綺（清代）：林蕙堂全集，卷十六亭臬詩集：清文淵閣四庫全書本

段玉裁（清代）：說文解字註，卷七篇上：清嘉慶二十年經韻樓刻本

施男（清代）：叩竹杖，卷五：清初留髡堂刻本

計東（清代）：改亭詩文集，文集卷九：清乾隆十三年計瑣刻本

施閏章（清代）：學餘堂集，詩集卷四十四五言排律，清文淵閣四庫全書本

查慎行（清代）：敬業堂詩集，卷十三：四部叢刊景清康熙本

祝德麟（清代）：悅親樓詩集，卷二十五：清嘉慶二年姑蘇刻本

俞樾（清代）：春在堂詩編：清光緒二十五年刻春在堂全書本

陳文述（清代）：頤道堂集，詩選卷八古今體詩：清嘉慶十二年刻道光增修本

翁方綱（清代）：復初齋詩集，卷十三寶蘇室小艸三：清刻本

畢沅（清代）：靈巖山人詩集，卷二十一萍心漫草：清嘉慶四年經訓堂刻本

唐英（清代）：陶人心語，卷三：清乾隆唐寅保刻本

徐枋（清代）：居易堂集，卷八：清康熙刻本

華長卿（清代）：梅莊詩鈔，卷十白門續集：清同治九年刻本

孫枝蔚（清代）：溉堂集，續集卷六：清康熙刻本

秦松齡（清代）：蒼峴山人集，卷一碧山集：清嘉慶四年秦瀛刻本

孫星衍（清代）：（嘉慶）松江府志：上海書店 1991 年影印本

徐崧（清代）：百城烟水：清康熙二十九年刻本

徐乾學（清代）：憺園文集，卷二十六：清康熙刻冠山堂印本

陸肇域·任兆麟（清代）編纂，張維明（1995）校補：虎阜志：古吳軒出版社

陶澍（清代）：陶文毅公全集，卷四十五文集：清道光刻本

秦蕙田（清代）：五禮通考，卷一百十六吉禮一百十六：清文淵閣四庫全書本

倪濤（清代）：六藝之一錄，卷三百八十七：清文淵閣四庫全書本

陳鶴（清代）：明紀，卷三：清同治十年江蘇書局刻本

張玉書（清代）：康熙字典：中華書局香港分局 1958 年本

張英（清代）：淵鑒類函，卷一百七十一禮儀部十八：清文淵閣四庫全書本

張貞（清代）：杞田集，卷四：清康熙春岑閣刻本

張祥河（清代）：小重山房詩詞全集，詩舲詩外卷四：清道光刻光緒增修本

曹雪芹（清代）：紅樓夢，第十七回大觀園試才題對額榮國府歸省慶元宵：清乾隆五十六年萃文書屋活字印本（程甲）

黃達（清代）：一樓集，卷十七：清乾隆刻本

張雲章（清代）：樸村文集，卷二十三：清康熙華希閔等刻本

葉廷琯（清代）：楸花齋詩，卷上憶存草：清滂喜齋叢書本

斌良（清代）：抱冲齋詩集，卷二十三粉署趨承集一：清光緒五年崇福湖南刻本

馮桂芬（清代）：（同治）蘇州府志：清光緒九年刊本

鈕琇（清代）：臨野堂詩文集，詩集卷八：清康熙刻本

欽璉（清代）：虛白齋詩集，匏繫集下：清乾隆刻本

萬壽祺（清代）：隰西草堂詩文集，文集卷一賦序記書：民國八年明季三孝廉集本

褚人穫（清代）：堅瓠集，三集卷四：清康熙刻本

路德（清代）：櫻華館駢體文：清光緒七年解梁刻本

蔣士銓（清代）：忠雅堂文集，卷十四：清嘉慶刻本

趙宏恩（清代）：（乾隆）江南通志：清文淵閣四庫全書本

趙翼（清代）：甌北集，卷三十九：清嘉慶十七年湛貽堂刻本

厲鶚（清代）：樊榭山房集，續集卷七詩庚：四部叢刊景清振綺堂本

魯之裕（清代）：式馨堂詩文集，詩集前集七卷：清康熙乾隆間刻本

震鈞（清代）：國朝書人輯略，卷三：清光緒三十四年刻本

劉嗣綰（清代）：尚綱堂集，詩集卷四十三不易居齋集：清道光大樹園刻本

黎簡（清代）：五百四峰堂詩鈔，卷十六丙午年：清嘉慶元年刻本

錢泳（清代）：履園叢話，卷二十：清道光十八年述德堂刻本

錢澄之（清代）：田間詩文集，詩集卷二十二客隱集：清康熙刻本

錢謙益（清代）：牧齋有學集：四部叢刊景清康熙本

繆荃孫（清代）：雲自在龕隨筆，卷六：稿本

嚴可均（清代）：全上古三代秦漢三國六朝文，全梁文卷五十二：民國十九年景清光緒二十年黃岡王氏刻本

嚴熊（清代）：嚴白雲詩集，卷十三：清乾隆十九年嚴有禧刻本

顧炎武（清代）：肇域志，卷五：清鈔本

顧祿（清代）：清嘉錄，卷三：清道光刻本

丁祖蔭（民國）：重修常昭合志：上海社會科學出版社 2002 本

王祖畬（民國）：（民國）鎮洋縣志：江蘇古籍出版社 1991 影印本

## 中国語類

### 書籍

- Kate Kerby (1922) 撰, 莫宗中 (1922) 譯: 拙政園圖: 中華書局
- 劉敦楨 (1936): 蘇州古建築調查記: 中国營造学社, 52pp
- 陳從周 (1956): 蘇州園林: 同濟大學教材科, 293pp
- 陳從周 (1959): 私家園林: 古代建築史編輯組 (1959) 編: 古代建築史初稿: 内部發行本, 172-175
- 范煙橋 (1964): 拙政園志稿: 鄭曉霞ら (2006) 主編: 中國園林名勝志叢刊 30: 廣陵書社, 155pp
- 南京博物院 (1966) 編: 沈周東莊圖冊: 文物出版社
- 劉敦楨ら (1980) 編: 中国古代建築史: 中国建築工業出版社, 418pp
- 全國部分高等師範院校協編會議 (1981): 中國古代度量衡器標準變遷表: 全國部分高等師範院校協編會議 (1981) 編: 古代漢語參考資料, 甲編第二冊: 河南師範大學, 379-395
- 李允鈺 (1982): 華夏意匠: 廣角鏡出版社, 447pp
- 陳植ら (1983) 編: 中国歷代名園記選註: 安徽科學技術出版社, 443pp
- 童寯 (1983): 造園史綱: 中国建築工業出版社, 63pp
- 陳從周 (1983): 揚州園林: 上海科學技術出版社, 145pp
- 陳從周 (1984): 說園: 同濟大學出版社, 165pp
- 陳植 (1984): 長物志校註: 江蘇科學技術出版社, 456pp
- 童寯 (1984): 江南園林志: 中国建築工業出版社, 180pp
- 周道振 (1985): 文徵明書畫簡表: 人民美術出版社, 400pp
- 彭一剛 (1986): 中国古典園林分析: 中国建築工業出版社, 158pp
- 蘇州市地方志編纂委員会 (1986) 編: 拙政園志稿: 内部發行本, 193pp
- 國立故宮博物館編輯委員會 (1987) 編: 園林名畫特展圖錄: 國立故宮博物館, 91pp
- 張家驥 (1987): 中国造園史: 黑龍江人民出版社, 246pp
- 宗白華 (1987): 美学与意境: 人民出版社, 483pp
- 宗白華 (1987): 空間意識和空間美感: 江溶ら (1987) 編: 中國園林藝術概觀: 江蘇人民出版社, 5-16
- 陳植 (1988): 園冶註釋: 中国建築工業出版社, 272pp
- 何惠明ら (1988): 松江明代園林話旧: 上海市文史館文史資料工作委員會 (1988) 編: 歷史文化名城—上海: 上海社会科学院出版社, 155-158

- 董鑒泓（1989）：中国城市建設史：中国建築工業出版社，289pp
- 江蘇省昆山縣志委員會（1990）：昆山縣志：上海人民出版社，958pp
- 劉致平（1990）：中国居住建筑簡史：中国建築工業出版社，295pp
- 周維權（1990）：中国古典園林史：清華大学出版社，344pp
- 張家驥（1993）：園冶全釋：山西人民出版社，389pp
- 謝稚柳（1993）：郭熙王詵合集：上海人民出版社，59pp
- 蘇州市地方志編纂委員會（1995）：蘇州市志：江蘇人民出版社，946pp, 1116pp, 1255pp
- 陳從周（1996）：中國園林：廣州旅游出版社，258pp
- 楊永生（1996）編：中國古建築全覽：天津科學技術出版社，539pp
- 高敏（1996）編：魏晉南北朝經濟史：上海人民出版社，1093pp
- 侯紹庄（1997）：中国古代土地關係史：貴州人民出版社，351pp
- 張家驥（1997）：中国園林芸術大辞典：山西教育出版社，502pp
- 蘇州市城建檔案館·遼寧省博物館（1999）編，徐揚（清代）：姑蘇繁華圖：文物出版社
- 蘇州市地方志編纂委員會（1999）：老蘇州一百年舊影：江蘇人民出版社，165pp
- 陸文夫（2000）：老蘇州—水鄉尋夢：江蘇美術出版社，229pp
- 吳仁安（2001）：明清江南望族與社會經濟文化：上海人民出版社，334pp
- 松江文化志編写組（2001）編：松江文化志：百家出版社，295pp
- 錢鍾書（2002）：宋詩選註：三聯書店，480pp
- 錢勤學（2003）：山塘訪古筆記：徐剛毅（2003）編：七里山塘：上海古籍出版社，222pp
- 劉庭風（2003）：中日古典園林比較：天津大學出版社，169pp
- 張英霖（2004）：蘇州古城地圖集：古吳軒出版社
- 陶文鵬ら（2004）：靈境詩心—中国古代山水詩史：鳳凰出版社，896pp
- 陳從周ら（2004）選編：園綜：同濟大學出版社，527pp
- 邵忠ら（2004）編：蘇州歷代名園記選註：中国林業出版社，355pp
- 張十慶（2004）：作庭記譯註与研究：天津大學出版社，130pp
- 徐剛毅（2005）編：蘇州舊街巷圖錄：広陵書社，308pp
- 劉敦楨（2005）：蘇州古典園林：中国建築工業出版社，474pp
- 王稼句（2006）：消失的蘇州風景：福建美術出版社，157pp
- 汪菊淵（2006）：中国古代園林史：中国建築工業出版社，1047pp
- 陳泳（2006）：蘇州古城結構形態續化研究：東南大學出版社，239pp
- 張瑞雲（2008）編：補園旧事續編：古吳軒出版社，339pp

雜誌論文

- 陳植 (1930) : 中国造園史略 : 新農通議 1(4), 3-9
- 闕鐸 (1930) : 大都宮苑圖考 : 中国營造学社彙刊 1(2), 3-9
- 實符 (1933) : 廬江凌氏三榆草堂記 : 枕戈 1(4), 8
- 吳世昌 (1934) : 魏晉風流與私家園林 : 學文月刊 1 (2) , 3-9
- 王璞子 (1940) : 中國園林建築 : 中和月刊 1(7), 12-35
- 劉敦楨 (1957) : 蘇州的園林 : 南京工學院學報 (3)
- 陳從周 (1958) : 建築中的借景問題 : 同濟大學學報 3(1), 44-47
- 陳從周 (1958) : 常熟園林 : 文物參考資料 (3) , 45-47
- 孫篠祥 (1962) : 中国傳統園林藝術創作方法的探討 : 園藝學報 1 (1) , 79-88
- 潘谷西 (1963) : 蘇州園林的觀賞點和觀賞路線 : 建築學報 (6) , 14-18
- 潘谷西 (1963) : 蘇州園林的布局問題 : 南工學報 (3) , 45-65
- 郭黛姮ら (1963) : 蘇州留園的建築空間 : 建築學報 (4) , 19-23
- 孫篠祥 (1964) : 中國山水畫論中有關園林布局理論的探討 : 園藝學報 3 (1) , 63-74
- 周維權 (1966) : 避暑山莊的園林藝術 : 建築學報 (6) , 29-32
- 劉乃昌ら (1981) : 黄山谷的文藝思想和詩歌藝術 : 齊魯學刊 9(6), 60-65
- 曹汎 (1986) : 疊山名家戈裕良 : 中国園林 (2) , 53-54
- 曹汎 (1988) : 造園大師張南垣 (一) : 中国園林 (1) , 21-26
- 曹汎 (1988) : 造園大師張南垣 (二) : 中国園林 (3) , 2-9
- 張十慶 (1993) : 作庭記与園冶—中日古代造園專書的比較 : 中國園林 9(1), 19-22
- 馮晉 (1997) : 景字意義初探 : 華中建築 15(4), 103-105
- 夏冰 (1998) : 虎丘塔影園考 : 蘇州史志資料選集, 第 23 輯 : 229-230
- 陳超 (1999) : 曹學佺與閩中才子交遊考 : 東南學術 6, 171-176
- 施曉平 (2000) : 渡橋袁氏 : 蘇州史誌資料選集, 84
- 相秉軍ら (2000) : 蘇州古城傳統街巷及整体空間形態分析 : 現代城市研究 82, 26-27
- 朱則傑 (2000) : 袁枚蔣士銓訂交考 : 蘇州大學學報 (3) , 45-49
- 封雲 (2003) : 相地因借—中国園林的造園之法 : 同濟大學學報 14 (1) , 9-12
- 曹汎 (2004) : 網師園的歷史變遷 : 建築師 112, 104-112
- 王欣ら (2005) : 謝靈運山居考 : 中國園林 21(8), 73-77
- 朱雷 (2006) : 有關李漁便面窗的分析 : 華中建築 24 (10) , 163-164
- 王魯民ら (2007) : 對園冶叙述方式的探討 : 建築師 5(4), 66-67



Wybe Kuitert 著，陳曉彤（2008）譯：借景——中国《園冶》（1634）理論与 17 世紀日本造園藝術實踐：中国園林 29(6)，1-6

王潔（2008）：從建築與景觀解讀「盛世滋生圖」的資料性：華中建築 26（4），21-24

董豫贛（2009）：經營位置：時代建築（2），94-99

#### 學位論文

楊多（2004）：「乾隆南巡圖」研究：中央美術學院修士論文

王勁（2006）：蘇州古典園林理水与古城水系：東南大學修士論文

陳超（2007）：曹學佺研究：福建師範大學博士論文

薛曉飛（2007）：論中国園林設計「借景」理法：北京林業大學博士論文

馬曉溪（2008）：長三角區域秋季能見度特征及影響因子分析：東北大學修士論文

費一鳴（2008）：蘇州城市意象解析：蘇州科技學院修士論文

陶莎莎（2009）：明清時期蘇州文氏世家研究：蘇州大學修士論文

#### 日本語類

##### 書籍

松平定信（江戸）著，江間政彥（1893）編：楽翁公遺書，下卷：八尾書店

秋里離島（江戸）：都林泉名勝図会：竹村俊則（1979）編：日本名所風俗図会 7（京都卷 I）：角川書店，113-244

秋里離島（江戸）：拾遺都名所図会：竹村俊則（1981）編：日本名所風俗図会 8（京都卷 II）：角川書店，207-386

秋里離島（江戸）著，上原敬二（1972）編：都林泉名勝図会：加島書店，109pp

横井時冬（1889）：園芸考：大八洲学会，152pp

黒田讓（1903）：京都名勝記：京都市参事会，全 3 卷

黒田讓（1907）：江湖快心録続：山田芸草堂

近藤正一（1909）：庭園図説：博文館，211pp

大村西崖（1910）：支那絵画小史：審美書院，29pp

杉本文太郎（1910）：日本庭造法図解：建築書院，217pp

本多錦吉郎（1911）：日本名園図譜：小柴英

小沢圭次郎（1915）：明治庭園記：玉利喜造等（1975）合著：明治園芸史：有明書房

田村剛（1919）：庭園鑑賞法：成美堂，312pp  
上原敬二（1923）：庭園学概要：新光社，322pp  
吉村巖（1933）：庭造百題：明文堂，312pp  
外山英策（1934）：室町時代庭園史：岩波書店，757pp  
後藤朝太郎（1934）：満支風景庭園鑑：成美堂，1011pp  
重森三玲（1936-1939）：日本庭園史図鑑，有光社，全 24 卷  
岡大路（1943）：支那庭園論：彰國社，285pp  
重森三玲（1943）：日本庭園：一條書房，278pp  
森蘊（1945）：平安時代庭園の研究：桑名文星堂，483pp  
森蘊（1957）：日本の庭園：創元社，234pp  
吉村巖（1958）：日本庭園：朝倉書店，296pp  
森蘊（1959）：中世庭園文化史：大乘院庭園の研究：奈良国立文化財研究所，93pp  
森蘊（1962）：寢殿造系庭園の立地的考察：奈良国立文化財研究所，105pp  
上原敬二（1963）：日本式庭園：加島書店，197pp  
堀口捨己（1965）：庭と空間構成の伝統：鹿島研究所出版会，315pp  
伊藤ていじ（1965）：借景と坪庭：淡交社，221pp  
杉村勇造（1966）：中国の庭：求龍堂，267pp  
早川正夫（1967）：庭（日本の美術）：平凡社，168pp  
大庭侑（1967）：江戸時代における唐船持渡書の研究：関西大學東西学術研究所，744pp  
重森三玲（1969）：現代和風庭園：誠文堂新光社，309pp  
国土地理院（1969）：五万分一地形図 15，京阪地方：国土地理院  
橋川時雄（1970）解説：園冶：渡辺書店，459pp  
重森三玲ら（1971-1976）：日本庭園史大系：社会思想社，全 35 卷  
上原敬二（1972）：解説園冶：加島書店，108pp  
和田利男（1972）：文苑借景：渙乎堂，552pp  
森林太郎（1973）：鷗外全集，第二十三卷：岩波書店  
西沢文隆（1975）：庭園論 I：相模書房，429pp  
長谷川正海（1977）：日本庭園要説：白川書院，380pp  
川瀬一馬（1977）：古辞書概説：雄松堂書店，246pp  
江山正美（1978）：庭の文化史：文一総合出版，265pp  
上原敬二（1978）：造園大辞典：加島書店，956pp  
竹村俊則（1979）編：日本名所風俗図会 7（京都巻 I）：角川書店，484pp

京都市史編纂所（1979-1980）編：京都の歴史：京都市史編纂所，全10巻  
造園修景大事典編集委員会（1980）：造園修景大事典：同朋舎出版，全10巻  
鈴木敬ら（1982-2001）編：中國繪畫綜合圖録：東京大学出版会，全9巻  
八田準一（1984）：最新造園大百科事典：農業図書，504pp  
山本健吉（1984）：山本健吉全集，第四巻：講談社  
東京農業大学農学部造園学科造園用語辞典編集委員会編（1985）：造園用語辞典：彰  
国社，535pp  
国立公文書館（1985）編集：内閣文庫百年史：汲古書院，446pp  
佐藤昌（1986）：園冶研究：日本造園修景協会東洋庭園研究会，145pp  
国史大辞典編集委員会（1986）編：国史大辞典，第七巻：吉川弘文館  
科学書院（1986-2002）編：中国大陸五万分の一地図集成：科学書院  
大山平四郎（1987）：日本庭園史新論：平凡社，868pp  
佐藤昌（1988）：円明園：日本公園緑地協会，583pp  
科学書院（1989-1993）編：中国大陸二万五千分の一地図集成：科学書院  
稲次敏郎（1990）：庭園と住居の《ありやう》と《見せかた・見えかた》：日本・  
中国・韓国：山海堂，174pp  
末利光（1991）：間の美学—日本の表現：三省堂，219pp  
佐藤昌（1991）：中国造園史（上，中，下）：日本公園緑地協会，481pp，359pp，523pp  
国史大辞典編集委員会（1992）編：国史大辞典，第十三巻：吉川弘文館  
足利健亮（1994）：京都歴史アトラス：中央公論社，155pp  
本中真（1994）：日本古代の庭園と風景：吉川弘文館，384pp  
本中真（1997）：借景：至文堂，98pp  
田中淡（1997）：中國造園史文獻目録：京都大學人文科學研究所付屬東洋學文獻セン  
ター，73pp  
飛田範夫（1999）：日本庭園と風景：学芸出版社，271pp  
日本国語大辞典第二版編集委員会，小学館国語辞典編集部（2001）編：日本国語大辞  
典，第二巻：小学館  
田中淡（2003）：中国古代造園史料集成：中央公論美術出版，785pp  
小野健吉（2004）：日本庭園辞典：岩波書店，384pp  
染谷智幸（2005）：西鶴小説論：翰林書房，586pp

雑誌論文（記事）

- 養老仙史（1884）：園冶の問：大日本美術新報 3 号，70
- 古江隠士（1884）：園冶の答：大日本美術新報 4 号，93-94
- 小沢圭次郎（1890-1906）：園苑源流考：国華(5-141)
- 前田健次郎（1893）：園冶の話：日本美術協会報告 77 号，49-54
- 小沢圭次郎（1894）：原氏園亭遊覧ノ記：日本園芸会雑誌 54 号，24-27
- 本田錦吉郎（1905）：庭園の話：日本美術協会報告 168 号，15-26
- 古宇田実（1906）：庭覗き(五)：建築雑誌 20(237)，565-580
- 森歆之助（1914）：京都名園鳥瞰記：園芸之友(3)，243-250
- 田村剛（1916）：造園術と林学：大日本山林会報 403 号
- 上原敬二（1917）：森林美学と造園術：大日本山林会報 410 号
- 上原敬二（1917）：造園用語集（第一）：大日本山林会報 417 号
- 上原敬二（1917）：造園用語集（第一）：大日本山林会報 418 号
- 田村剛（1917）：造園の起源と芸術としての造園：大日本山林会報 413 号
- 田村剛（1917）：建築的造園の真髓：大日本山林会報 414 号
- 田村剛（1917）：風景美と造園美と人工林の美：大日本山林会報 419 号，10-17
- 上原敬二（1918）：庭園の字源的解釈：大日本山林会報 426 号，1-19
- 上原敬二（1918）：造園用語集（第二）：大日本山林会報 428 号
- 上原敬二（1918）：造園における花候学の価値：大日本山林会報 433 号
- 伊東忠太（1918）：西苑：庭園 1(1)，20
- 上原敬二（1919）：造園における樹木の生長：大日本山林会報 436 号
- 田村剛（1920）：造園美としての自然と人工：大日本山林会報 446 号
- 田村剛（1920）：現代文明を背景として見たる造園：大日本山林会報 450 号
- 田村剛（1920）：造園美としての自然と人工：大日本山林会報 446 号，10-17
- 山田彦一（1922）：大徳寺と桂離宮の庭を拝見して：庭園 4(1)，16-17
- 黒田鵬心（1922）：京都の古建築：庭園 4(1)，20-23
- 森歆之助（1922）：庭園と環境：庭園 4(4)，24-26
- 保岡勝也（1923）：京阪の名園見学に就いて：庭園 5(2)，28-31
- 龍居松之助（1923）：北京住宅の庭：庭園 5(2)，8-9
- 春浦生（1925）：京都旅行の印象：庭園 7(2)，16-17
- 市川之雄（1925）：某画伯の庭：庭園 7(11)，7-9
- 竜居松之助（1926）：見学名園に就いて：庭園 8(11)，20-21

- 原熙（1926）：支那庭園と様式：庭園 8(12), 2-3
- 上原敬二（1926）：借景とヴィスタ：造園学雑誌 2(1), 121-127
- 重森三玲（1927）：京都名園の芸術的価値：庭園 9(10), 16-19
- 春浦生（1927）：茶庭三題：庭園と風景 9(11), 12-13
- 竜居松之助（1928）：日本名園百種：庭園と風景 10(8), 8-19
- 小寺駿吉（1929）：中国園林典籍：庭園と風景 11(1), 7
- 重森三玲（1931）：日本庭園に於ける塀及び籬の役目：風景と庭園 13(1), 24-28
- 重森三玲（1931）：私の好きな庭園一つ：風景と庭園 13(2), 24-25
- 福井良暢（1934）：吉野山竹林院の庭園：風景と庭園 16(9), 27-28
- 黒田鵬心（1935）：庭の味ひ方：庭園と風景 17(2), 40-41
- 池辺武人（1935）：京都庭園の借景：庭園と風景 17(10), 20-21
- 関口鉄太郎ら（1935）：京都名園の鑑賞：風景と庭園 17(11), 22-25
- 小坂立夫（1936）：京都名園鑑賞会の記：庭園 18(1), 12-17
- 山本光ら（1936）：京都名園鑑賞会感想：庭園 18(1), 18-22
- 保岡勝也（1936）：慈光院の書院庭と不昧室：庭園 18(7), 2-5
- 保岡愛子（1936）：お庭廻り：庭園 18(7), 28-31
- 重森三玲（1936）：中井氏居然亭庭園と平井氏霊鷲山荘庭園：林泉 2(21), 257-264
- 重森三玲（1936）：慈光院の庭園及茶席：林泉 2(23), 319-350
- 佐藤珠光庵（1938）：名園巡礼記の一節：庭園 20(4), 22-24
- 山本信正（1938）：偕楽園記に就て：造園雑誌 5(2), 110-113
- 福井典（1939）：新庭園見聞日記蕉庵ニ雲仙荘庭園：林泉 5(50), 39-44
- 重森三玲（1939）：支那庭園と日本庭園：林泉 5(55), 165-171
- 重森三玲（1940）：近代日本庭園に於ける「自然」への理解：林泉 7(73), 36-42
- 重森三玲（1941）：日本作庭考（六）：林泉 8(88), 35-48
- 重森三玲（1941）：日本作庭考（七）：林泉 8(89), 49-54
- 竜居松之助（1942）：清水寺成就院の庭園：庭園 24(3), 23
- 何英吉（1942）：借景：庭園 24(10), 13
- 辻村常助（1943）：京都鷹ノ峯光悦寺の庭園：庭園 25(8), 1-2
- 管野義胤（1949）：楽翁公の自然観と作庭：造園雑誌 12(2), 9-14
- 田治六郎（1949）：洛陽名園記と金陵諸園記とから見た宋明兩代の庭園：造園雑誌 13(1), 11-16
- 田治六郎（1953）：李漁の庭園論：造園雑誌 14(2), 25-36

- 田治六郎（1953）：謝肇淛の庭園論：造園雑誌 16(3・4), 16-19
- 芳賀幸四郎（1957）：五山文学の展開とその様相：国語と国文学 34(10), 110-118
- 伊藤照秋ら（1972）：中国地方における古庭園についての史的考察：造園雑誌 36(3), 3-9
- 澤田天瑞（1976）：慈光院庭園の構成について：造園雑誌 40(1), 29-34
- 本中真（1981）：「平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園」における眺望景観の復元的考察：造園雑誌 44(4), 203-219
- 大輪靖宏（1981）：俳句の借景性：上智大学国文学論集 14, 41-60
- 鈴木誠（1985）：旧伏見宮家別邸銚子瑞鶴荘の庭について：造園雑誌 48(5), 61-66
- 進士五十八（1986）：「借景」に関する研究：造園雑誌 50(2), 77-88
- 張綺曼（1986）：中国・日本住空間の比較研究：中国の庭園と日本の庭について：デザイン学研究(54), 37-42
- 小野健吉（1987）：対竜山荘庭園における小川治兵衛の作庭手法：造園雑誌 50(5), 13-17
- 田中淡（1988）：中国造園史研究の現状と諸問題：造園雑誌 51(3), 190-199
- 川北健雄（1991）：円通寺庭園の景観構成と諸要素のイメージについての考察：造園雑誌 54(5), 221-226
- 尼崎博正（1994）：七代目小川治兵衛(植治)：近代庭園の先覚者：ランドスケープ研究 58(2), 107-110
- 小林治人（1995）：酔園小沢圭次郎—伝統庭園庇護・継承に生きた「設景家」：ランドスケープ研究 58(3), 245-248
- 柄谷行人（1998）：借景に関する考察：批評空間 2(17), 35-46
- 仙田満ら（2001）：中国園林における廊的空間に関する研究：日本建築学会計画系論文集(542), 261-267
- 河原武敏（2004）：中国庭園における「景」構成(2)—「景」に関する用語の考察：平成 16 年度日本庭園学会関西大会研究発表要旨, 1-13
- 内山精也（2006）：万里集九と宋詩：アジア遊学 8(93), 111-121
- 李偉（2008）：中国庭園における「借景」の史的研究—黄庭堅「山谷集」を中心に：平成 20 年度日本造園学会関西支部大会研究事例発表会要旨, 1-2
- 小坂橋二三男ら（2010）：小沢圭次郎（酔園）の東京府立園芸学校に於ける造園教育について：ランドスケープ研究 73(5), 786-795

## 英語類

Roderick Whitfield, *In pursuit of antiquity: Chinese paintings of the Ming and Ching dynasties from the collection of Mr. and Mrs. Earl Morse* (Princeton, N.J.: Art Museum, Princeton University, 1969).

Richard M. Barnhart, *Peach Blossom spring: gardens and flowers in Chinese painting* (New York: Metropolitan Museum of Art, 1983).

Craig Clunas, *Fruitful sites: garden culture in Ming dynasty* (London: Reaktion, 1996).

Feng Jin, 'Jing, the concept of scenery in texts on the traditional Chinese garden: an initial exploration', *Studies in the History of Gardens & Designed Landscapes*, (18 winter 1998), pp. 339-361

Gunter Nitschke, *Japanese Garden: right angle and natural form* (London: Taschen, 1999).

Stanislaus Fung, 'Self, scene, and action: the final chapter of Yuan ye,' 2000, edited by Jan Birksted, *Landscapes of memory and experience* (London: Spon Press, 2000), pp.129-132

## 論文の内容の要旨

森林科学 専攻  
平成21年度博士課程 入学  
氏名 周 宏俊  
指導教員名 下村 彰男

論文題目 借景の展開と構成—日本・中国造園における比較研究

「借景」は、日本と中国において、近代以来の造園学研究における数少ない共通の用語であり、かつ重要な概念の一つである。また日本と中国双方において、借景を擁する庭園という評価の定着した庭園が多くみられる。しかし、現在の日本と中国における借景には、その概念においても実際の庭園にみられる空間や景観の構成においても、同一とは言いがたい差異がある。

これに対して、日本と中国の造園学研究では、借景の概念と技法を対象とした系統立った研究がともに未だ存在せず、また両国の借景の比較研究も進んでいない現状にある。そのため借景という概念や技法が歴史的な時間軸上あるいは地理・文化的な空間軸上で相対視されることのないまま、個々の議論や実践が展開されているという状況にあり、学術的にも多くの課題を残している。

そこで本研究は、日本と中国の造園における「借景」を対象として、その概念と技法の特質を、歴史を含めた相対的視点から明らかにすることを目的とする。具体的には、日本と中国双方における、1. 借景という用語と概念の展開と変遷、



2. 借景の造園的技法と庭園に実現された構造, 3. 借景の概念と技法に内包されている造園上の理念, を明らかとすること, さらに4. 以上を踏まえた日本と中国の比較考察, の四点を研究課題とする。

第一章では, 上記の研究の背景と目的, 本研究の視点, 既往研究のレビューをふまえた研究の位置づけを示すとともに, 研究の方法, 論文の構成および用語の定義等について述べた。

第二章では, 中国における借景の用語の起源と, 古典文献から近代の研究に至るまでの概念の変遷, および各概念に反映されている借景の構造の特徴を明らかにした上で, 現在理解されている借景の概念と近代以前の概念との差異, およびその差異を引き起こした要因について考察した。その結果, 宋代の黄庭堅による「借景亭」という表現が借景という用語の濫觴であること, その後の清代の李漁による「尺幅窓」も借景の概念の展開において重要であることなどが明らかとなった。またこれら「借景亭型」と「尺幅窓型」の借景の構造は, 園内から園外までの眺望とは異なる, 小規模な技法であったことを明らかとした。これらに対して, 現在借景に関する書として良く知られる明代の『園冶』は, 「遠眺型」といえる借景について解説したものの, 当時の借景概念に与えた影響は弱かったことが考察された。しかし, 近代以降の借景という用語は, 陳從周などの主導した造園研究において, 『園冶』の借景を基礎とする位置づけが支配的となり, 借景の構成が古典の「借景亭型」と「尺幅窓型」から大規模な「遠眺型」へと変化したことが考察された。

第三章では, 日本の造園における借景の用語の起源と, その概念の変遷を明らかとし, さらに典型とされる庭園を事例に借景の構造の特徴について考察した。その結果, 中国での「借景」の嚆矢である宋代の黄庭堅の詩集が中国から伝来していたこと, 室町時代の万里集九の『帳中香』が日本での「借景」の濫觴である可能性が高いことなどが明らかとなった。しかし, 造園の領域においては, 「借景」の用語と概念が自覚的に用いられるようになったのは明治期であり, その概念は『園冶』に解説された概念に近い, 遠距離の眺望に相当するものであったことが明らかとなった。さらに近代以降, 借景の意味・概念は次第に狭く, 厳密に, また複雑に規定されてきたことがわかった。続いて, 借景庭園の事例を収集しその典型事例を対象に景観にかかわる空間の構造を分析したところ, 借景庭園の代表とされる庭園は, 「小中見大」という空間意匠として整理することができた。このような庭園意匠の独自性から, 日本の造園における借景の概念は『園冶』から離れ, 日本庭園自身の意匠として展開してきたことが考察された。なお, 日本において輸入・出版された『園冶』の版を調査しその普及の経緯を分析したとこ

る、明治期の「借景」はこの時期の『園冶』の普及によって展開したことが推測された。その背景として、明治期の近代公共図書館の発達と古典籍の公開化などの要因が考察された。

第四章では、中国庭園を対象に、眺望に関する造園的技法および眺望の構造を明らかにし、その造園上の理念について考察した。まず園記などの古文献に基づいて、眺望の一般モデルが「登高眺遠」、すなわち庭園内の楼阁あるいは築山などの高所から園外に位置する山などを眺める構造として抽出された。さらに高所が景観シーケンスの終端部に設定されることが造園における理想的なモデルであることが考察された。次に蘇州地域におけるすべての古典庭園を調査し、特に拙政園の眺望に関する歴史の変遷を考証し、北寺塔までの眺望に関する意識と庭園内の水景と境界の変遷の関連性を検討した。その結果、創立期における拙政園から北寺塔は眺望できたが水景が現存の状態と異なっていたこと、創立期の拙政園は境界性が弱く庭園が周辺の田野と混然とした状況にあったことなどがわかり、塔の眺望は古城における日常的風景であり、塔よりも周囲の山が造園上意識されていた可能性が高かったことが考察された。続いて、塔を眺望対象とする10庭園に関して、考証の上、庭園の配置、景観にかかわる空間構造を分析した。その結果、庭園から空間的な境界で隔てられた塔の眺望が造園上意識されていた可能性が高いこと、また多くが小スケールの庭園で、囲み性が強かったことなどが明らかとなった。さらに、山を眺望対象とする庭園に関して、視対象や視点など景観要素の関係性やおよび庭園分布の特徴を分析し、庭園の立地条件による景観にかかわる空間構造を分析した。その結果、庭園の立地は山の眺望よりも山に近いことが重視されていたこと、山から遠い庭園では眺望の視点場の配置が理想的なモデルに合致し、山に近い庭園では理想的なモデルとの間に齟齬があることなどが明らかとなった。以上を踏まえ、中国蘇州の庭園の眺望における理想的なモデルとそこに含まれる造園理念として、眺望の視点が庭園の遊覧経路の終端部の高所に設置され、遊覧経路に沿って景観シーケンスが小から大、低から高、近から遠へと変化すること、すなわち「小後見大」という意匠を考察、抽出した。理想的な眺望対象は庭園からある境界によって隔てられ、高所の視点からに限り眺められるものとして考えられてきたことが整理された。

第五章では、日本庭園を対象に、借景に関する造園的技法および借景の構造を明らかにし、その造園上の理念について考察した。まず借景庭園の実例を収集した上で、景観工学の手法に基づいて分析指標を設定し、庭園の方向性と「大小性指数」（「大小性指数」＝仰角×（眺望視距離眺望方向における庭園の奥行き））との関係を分析した。その結果、庭園設計における借景に対する意識が眺望対象

のスケールと比例的関係にあることを明らかとした。次に、隣接する山に背向するように立地する庭園を対象に、それぞれの庭園の眺望の形式および眺望に対する意識に注目して分析を行った。その結果、これらの庭園では、庭園からの可視範囲内における顕著なランドマークとなる山が眺望対象となり、それに対する方向ないし庭園の空間配置全体が借景を目的として確定された可能性が高いことを明らかとした。さらに、京都地域における主要な臨済宗寺院を対象に、立地環境と庭園要素の形式に関する分析を行い、少なくとも江戸初期以前にこれらの臨済宗寺院の庭園では借景が遍在的に得られていたことを明らかとした。以上を踏まえ、日本の借景庭園における造園上の本質的な理念として、「小中見大」の意匠、すなわち小さい庭園空間を通してより大きい借景空間を覗き見ることによって得られる大と小の対比が、借景及び借景庭園が内包する特質と理想形式であることを考察した。

第六章では、研究の総括として、日本と中国における借景の概念を比較した上で、両者の借景概念の差異の背景となる要因を考察した。両国の造園学において、「借景」はともに近代初頭に『園冶』から導入された。しかし以後両国間の借景は異なる展開を示し、中国では、基本的に現在でも『園冶』を規範として借景が理解されているのに対して日本では、庭園の実例が比較的多く、借景の概念は次第に『園冶』から離れ、個別の庭園の構成によって理解されるようになったことを明らかとした。さらに、両者の借景における造園理念として、中国では「登高眺遠」という眺望の形式と「小後見大」という体験の理念が認められること、日本では低所の固定視点からの眺めという眺望の形式と「小中見大」という体験の理念が認められることを考察した。また庭園設計時の眺望に対する意識に関しては、日本の典型的な借景庭園では特定の借景対象を基準に庭園の方向と配置が定められていた可能性が高いのに対して、中国の多くの庭園では外景はあまり意識されていなかった可能性が高いことが考察された。こうした差異の背景となる要因として、日本における多くの借景庭園と比べて、中国における多くの庭園は、方向性が固定されない回遊式が中心であることなどが考察された。日本では借景を主題とする借景庭園という類型が生まれたのに対して、中国では借景は庭園における景観構成の一部にすぎないということができる。